

平成19年度
平成20年度
平成21年度

加茂市内遺跡確認調査報告書

五反田地区	山島新田地区
加茂新田地区	鶯森地区
堀割遺跡	古見道遺跡
西吉津川遺跡	馬越遺跡
荒又遺跡	太田遺跡
舞台遺跡周辺地	陣ヶ峰遺跡
陣ヶ峰北遺跡	

2010

新潟県加茂市教育委員会

平成 19 年度
平成 20 年度
平成 21 年度

加茂市内遺跡確認調査報告書

五反田地区	山島新田地区
加茂新田地区	鵜森地区
堀割遺跡	古見道遺跡
西吉津川遺跡	馬越遺跡
荒又遺跡	太田遺跡
舞台遺跡周辺地	陣ヶ峰遺跡
陣ヶ峰北遺跡	

2010

新潟県加茂市教育委員会

序

「北越の小京都」と謳われる我が加茂市には、清流加茂川を中心とした風光明媚な自然環境の中で、約2万年前に遡る旧石器時代から中世に至るまでの遺跡が約170程確認されています。加茂川上流の山間部では縄文時代、下流の平野部では平安時代の遺跡が多く存在し、様々な開発に伴い、発掘調査がされています。

本書で報告する信濃川流域の4地区と8遺跡、1遺跡周辺地を対象とした試掘・確認調査は平成19～21年度にかけて行われたものです。私たちはその結果を踏まえ、多くの開発行為と埋蔵文化財包蔵地との調整を行い、その取扱いについて協議を重ねています。

古見道遺跡は水田の区画工事の最中に遺構が確認されましたが、耕作者のご協力の下、急速調査することができ、17世紀初め頃の集落跡を確認しました。加茂市内では近世遺跡の調査事例は少なく、貴重な事例となりました。

堀割遺跡、西吉津川遺跡、馬越遺跡、荒又遺跡、太田遺跡はいずれも下条川流域の遺跡ですが、古代～中世の土器が多く出土しました。

本書はこのような小規模な調査のささやかな成果の報告書です。私たちは、貴重な文化財を各地域における祖先の活動を証明する資料として、大切に保存し、後世に伝え、郷土愛を育む責務があると思います。

このたび、確認調査報告書を刊行するにあたって、本書が当地域の学術・研究資料として多くの皆様に活用され、埋蔵文化財に対する理解と保護思想が深まれば、この上なく幸せであります。

最後に、発掘調査に対して様々なご指導とご協力を頂いた新潟県教育庁文化行政課、並びに発掘調査に参加された地元の方々、地権者及び工事関係者に対し、ここに深甚なる謝意を表する次第であります。

平成22年11月

加茂市教育委員会

教育長 井上信二

例 言

- 1 本報告書は、平成19・20・21年度に新潟県加茂市内の各種開発に伴い実施した8遺跡、1遺跡周辺地、4地区における試掘・確認調査の記録である。
- 2 調査は五反田・山島新田・加茂新田・鶴森地区が信濃川下流河川災害復旧等関連緊急事業、堀割遺跡・古見道遺跡が農業基盤整備事業、西吉津川遺跡・鳥越遺跡・荒又遺跡・太田遺跡が県営ほ場整備事業吉津川地区、舞台遺跡周辺地・陣ヶ峰遺跡・陣ヶ峰北遺跡が民間開発に伴い実施したものである。
- 3 試掘・確認調査の経費は、国庫及び県費の補助金交付を受けた。
- 4 調査は加茂市教育委員会が主体となり実施した。調査体制（平成19・20・21年度）は以下の通りである。

調査主体	加茂市教育委員会	教 育 長	井上信二
総 括		社会教育課長	中滝孝明（平成21年10月31日まで）
		社会教育課長	齋藤 淳（平成21年11月1日から）
管 理		社会教育課参事	相田喜一郎（平成21年3月31日まで）
		社会教育課参事	樋口恒志（平成21年10月31日まで）
庶 務		社会教育課主査	石井美代子
調査担当		社会教育課係長	伊藤秀和
調査補助員		日々雇用職員	鈴木 進（平成19年度）・山田 昇
現場作業員	大橋宏二・大野宏治・酒井昭代・坂上勝利・鈴木定二・鈴木秀夫・田浦武浩・高橋栄一・千葉泰行・中川賢一・名古屋悦男・西村冬彦（社団法人加茂市シルバー人材センター会員）		
整理作業員	櫻井恵美子・高橋雅子・前嶋明子		
整理作業協力者	泉田智子		

- 5 調査記録図面・写真類、出土遺物は一括して加茂市教育委員会が保管している。
- 6 本書で示す方位は全て真北である。
- 7 挿図に使用した既存図面については、その出典を記した。
- 8 本書に掲載した遺物は各遺跡の種別毎に通し番号を付し、本文及び観察表・挿図図面・写真図版の番号はすべて同一としている。
- 9 写真図版1、6、11の空中写真は（株）オリスが平成3年11月に撮影した縮尺約1/12,500×83%のものを使用している。
- 10 引用・参考文献は著者と発行年（西暦）を〔 〕で文中に示し、巻末に一括して掲載している。ただし、第VI章自然科学分析は引用文献を末尾に記した。
- 11 本報告書の執筆は、第VI章については、（株）バリノ・サーヴェイに資料を委託し、同社より原稿を頂いた。その他の執筆と編集は全て伊藤秀和が行った。
- 12 遺物写真撮影は（株）セビアスに委託した。墨書土器赤外線写真は田中一穂氏が撮影した。
- 13 挿図、遺構図、遺物図の製図、写真図版の版組み及び全体のデジタル編集・データ化は、（株）セビアスに委託した。
- 14 須志器の産地及び古代土器については春日真実氏（新潟県埋蔵文化財調査事業団）、中世の土器については水澤幸一氏（胎内市教育委員会）、近世磁器については安藤正美氏（見附市教育委員会）からご指導・教示を頂いた。
- 15 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の諸氏から多大な御教示・御協力を賜った。厚く御礼申し上げる次第である（敬称省略・五十音順、機関などは順不同）。

青木良作・安藤正美・池野芳男・小熊博史・尾崎高室・小野塚隆盛・春日真実・茂岡明与司・関 正平
田中一穂・田村浩司・立木宏明・鶴巻栄正・水澤幸一・宮田志保・西潟俊明・長谷川昭一
（社）加茂市シルバー人材センター・（株）大東建託・（株）エステートコンサルタント・小柳建設（株）
（株）外山組・（株）堀内組・（株）浦井組・浦井建設工業（株）・（株）渡辺建材・（株）山内組・（株）セビアス
加茂郷土地改良区・加茂市建設課・三条土地改良区・信濃川河川下流工事事務所・新潟県教育庁文化行政課
新潟県三条地域振興局・加茂市文化財調査審議会

目 次

第I章 序 説

1 平成19年度事業の概要	1
2 平成20年度事業の概要	1
3 平成21年度事業の概要	1
4 遺跡の位置と環境	2

第II章 信濃川下流河川災害復旧等関連緊急事業関連

1 調査に至る経緯	3
2 五反田地区	4
(1) 調査対象地と試掘調査の概要	4
(2) 層 序	4
(3) 遺構と遺物	4
(4) 調査のまとめ	4
3 山島新田・加茂新田地区	6
(1) 調査対象地と試掘調査の概要	6
(2) 層 序	9
(3) 遺構と遺物	9
(4) 調査のまとめ	9
4 鶴森地区	9
(1) 調査対象地と試掘調査の概要	9
(2) 層 序	10
(3) 遺構と遺物	10
(4) 調査のまとめ	10

第III章 農業基盤整備事業関連

1 調査に至る経緯	11
2 堀割遺跡	11
(1) 遺跡と確認立会い調査の概要	11
(2) 出土遺物	12
(3) 調査のまとめ	12
3 古見遺跡	12
(1) 遺跡と確認調査の概要	12
(2) 層 序	14
(3) 遺構と遺物	14
(4) 調査のまとめ	15

第IV章 県営ほ場整備事業吉津川地区関連

1 調査に至る経緯	16
2 西吉津川遺跡	16
(1) 遺跡と確認立会い調査の概要	16
(2) 遺構と遺物	17
(3) 調査のまとめ	19
3 馬越遺跡	19
(1) 遺跡と確認立会い調査の概要	19
(2) 遺構と遺物	19
(3) 調査のまとめ	19
4 荒又遺跡	20
(1) 遺跡と確認立会い調査の概要	20
(2) 遺構と遺物	20

(3) 調査のまとめ	21		
5 太田遺跡	21	(2) 遺構と遺物	21
(1) 遺跡と確認立会い調査の概要	21		
(3) 調査のまとめ	21		

第V章 民間開発関連

1 調査に至る経緯	23		
2 舞台遺跡周辺地	24		
(1) 調査対象地と試掘調査の概要	24	(2) 層序	25
(3) 遺構と遺物	25	(4) 調査のまとめ	25
3 陣ヶ峰遺跡	25		
(1) 調査対象地と確認調査の概要	25	(2) 層序	25
(3) 遺構と遺物	26	(4) 調査のまとめ	26
4 陣ヶ峰北遺跡	26		
(1) 調査対象地と確認調査の概要	26	(2) 層序	26
(3) 遺構と遺物	27	(4) 調査のまとめ	27

第VI章 古見道遺跡の自然科学分析

1 はじめに	28		
2 放射性炭素年代測定	28		
(1) 試料	28	(2) 分析方法	28
(3) 結果	29		
3 樹種同定	29		
(1) 試料	29	(2) 分析方法	29
(3) 結果	30	(4) 考察	30

第VII章 まとめ

《引用・参考文献》	32		
《別表》	33		
1 堀割遺跡 土器観察表	33	6 馬越遺跡 土器観察表	34
2 古見道遺跡 磁器観察表	33	7 荒又遺跡 土器観察表	34
3 古見道遺跡 石器観察表	33	8 太田遺跡 土器観察表	34
4 古見道遺跡 木製品観察表	33	9 陣ヶ峰北遺跡 土器観察表	34
5 西吉津川遺跡 土器観察表	33		
《報告書抄録》	巻末		

挿図目次

第 1 図	調査対象遺跡・地区位置図…………… 2	第 17 図	古見道遺跡確認調査出土遺物…………… 14
第 2 図	試掘調査対象地位置図…………… 3	第 18 図	調査対象遺跡位置図…………… 17
第 3 図	五反田村移転略図…………… 4	第 19 図	西古津川遺跡出土遺物…………… 18
第 4 図	明治 34 年信濃川測量図…………… 5	第 20 図	馬越遺跡出土遺物…………… 19
第 5 図	五反田地区試掘調査トレンチ位置図…………… 6	第 21 図	荒又遺跡出土遺物…………… 20
第 6 図	五反田地区試掘調査トレンチ土層柱状図…………… 6	第 22 図	太田遺跡出土遺物…………… 22
第 7 図	山島新田・加茂新田地区試掘調査トレンチ位置図…………… 7	第 23 図	舞台遺跡推定範囲と調査対象地位置図…………… 24
第 8 図	山島新田・加茂新田地区試掘調査トレンチ土層柱状図…………… 8	第 24 図	舞台遺跡周辺地試掘調査トレンチ位置図…………… 24
第 9 図	鶴森地区試掘調査トレンチ位置図…………… 9	第 25 図	舞台遺跡周辺地試掘調査トレンチ土層柱状図…………… 24
第 10 図	鶴森地区試掘調査トレンチ土層柱状図…………… 10	第 26 図	陣ヶ峰遺跡・陣ヶ峰北遺跡推定範囲と調査対象地位置図…………… 25
第 11 図	堀割遺跡推定範囲と調査対象地位置図…………… 12	第 27 図	陣ヶ峰遺跡確認調査トレンチ位置図…………… 26
第 12 図	堀割遺跡確認調査出土遺物…………… 12	第 28 図	陣ヶ峰遺跡確認調査トレンチ土層柱状図…………… 26
第 13 図	古見道遺跡推定範囲と調査対象地位置図…………… 13	第 29 図	陣ヶ峰北遺跡確認調査トレンチ位置図…………… 27
第 14 図	古見道遺跡推定範囲と調査対象地位置図…………… 13	第 30 図	陣ヶ峰北遺跡確認調査トレンチ土層柱状図…………… 27
第 15 図	古見道遺跡土層柱状図…………… 13	第 31 図	陣ヶ峰北遺跡確認調査出土遺物…………… 27
第 16 図	古見道遺跡遺構全体略図…………… 13	第 32 図	木材…………… 30

表目次

第 1 表	発掘調査工程表…………… 1	第 3 表	放射性炭素年代測定結果…………… 29
第 2 表	試掘調査履歷一覧…………… 3	第 4 表	暦年校正結果…………… 29

写真図版目次

写真図版 1	【五反田 山島新田 加茂新田 鶴森地区】五反田 山島新田 加茂新田 鶴森地区周辺の空中写真 五反田地区 調査地近景（東から）五反田地区 3 トレンチ調査風景（西から）五反田地区 1 ト レンチ土層断面（南から）五反田地区 3 トレンチ土層断面（南から）
写真図版 2	【山島新田 加茂新田地区】山島新田地区 11～15 トレンチ周辺近景（西から）加茂新田地区 21 ～23 トレンチ周辺近景（東から）加茂新田地区 22 トレンチ調査風景（北から）加茂新田地区 32 トレンチ調査風景（北東から）山島新田地区 12 トレンチ土層断面（西から）山島新田地区 18 トレンチ土層断面（南から）山島新田地区 19 トレンチ土層断面（南から）加茂新田地区 22 トレンチ土層断面（南から）
写真図版 3	【加茂新田 鶴森地区】加茂新田地区 24 トレンチ土層断面（東から）加茂新田地区 25 トレンチ 土層断面（西から）加茂新田地区 26 トレンチ土層断面（西から）加茂新田地区 27 トレンチ土層 断面（東から）鶴森地区 1～3 トレンチ周辺近景（北から）鶴森地区 7 トレンチ調査風景（北東 から）鶴森地区 5 トレンチ土層断面（北東から）鶴森地区 7 トレンチ土層断面（南西から）
写真図版 4	【堀割遺跡 古見道遺跡】堀割遺跡 調査地近景（東から）堀割遺跡 調査地近景（南東から）堀割 遺跡 土層断面（北東から）堀割遺跡 出土遺物 古見道遺跡 遠景（南西から）古見道遺跡 調査 風景（北西から）古見道遺跡 全景（北西から）古見道遺跡 全景（南東から）
写真図版 5	【古見道遺跡】古見道遺跡 基本土層断面（北から）古見道遺跡 SP1 確認状況（北から）古見道遺 跡 SP2 確認状況（北から）古見道遺跡 SP4 礎石出土状況（東から）古見道遺跡 出土遺物

- 写真図版 6 【西古津川遺跡 馬越遺跡 荒又遺跡 太田遺跡】 西古津川遺跡 馬越遺跡 荒又遺跡 太田遺跡周辺の空中写真 西古津川遺跡 調査風景（南から） 西古津川遺跡 調査風景（南西から） 西古津川遺跡 調査風景（東から） 西古津川遺跡 遺構確認状況（南東から）
- 写真図版 7 【西古津川遺跡】 西古津川遺跡 出土遺物
- 写真図版 8 【馬越遺跡】 馬越遺跡 調査風景（北から） 馬越遺跡 調査風景（北から） 馬越遺跡 調査風景（西から） 馬越遺跡 調査風景（東から） 馬越遺跡 土層断面（東から） 馬越遺跡 土層断面（西から） 馬越遺跡 出土遺物
- 写真図版 9 【荒又遺跡】 荒又遺跡 調査風景（南西から） 荒又遺跡 調査風景（南東から） 荒又遺跡 土層断面（南から） 荒又遺跡 土層断面（南東から） 荒又遺跡 出土遺物
- 写真図版 10 【太田遺跡】 太田遺跡 調査風景（北から） 太田遺跡 調査風景（東から） 太田遺跡 出土遺物
- 写真図版 11 【舞台遺跡周辺地 陣ヶ峰遺跡 陣ヶ峰北遺跡】 舞台遺跡周辺地 調査地近景（南から） 舞台遺跡周辺地 2トレンチ調査風景（東から） 舞台遺跡周辺地 1トレンチ土層断面（北から） 舞台遺跡周辺地 3トレンチ土層断面（北から） 陣ヶ峰遺跡 陣ヶ峰北遺跡周辺の空中写真
- 写真図版 12 【陣ヶ峰遺跡 陣ヶ峰北遺跡】 陣ヶ峰遺跡 調査地近景（北西から） 陣ヶ峰遺跡 1トレンチ調査風景（北から） 陣ヶ峰遺跡 1トレンチ土層断面（西から） 陣ヶ峰遺跡 2トレンチ土層断面（西から） 陣ヶ峰北遺跡 調査地近景（北から） 陣ヶ峰北遺跡 1トレンチ調査風景（南から） 陣ヶ峰北遺跡 1トレンチ土層断面（東から） 陣ヶ峰北遺跡 出土遺物

第I章 序 説

1 平成 19 年度事業の概要

平成 19 年度は、年度当初から県営ほ場整備事業吉津川地区に伴う荒又遺跡・太田遺跡発掘調査と信濃川下流河川災害復旧等関連緊急事業に伴う古用地解除済み区域を対象とした試掘調査が予定されていた。舞台遺跡周辺地区での民間開発は年度当初に把握していない案件である。本調査の期間が比較的短期であったことから、試掘調査も柔軟に対処できた。なお、整理作業については現場と併行し、ほ場整備事業に伴い平成 17・18 年度に発掘調査した馬越遺跡と国道 403 号交通連携事業に伴い平成 18 年度に発掘調査した馬越遺跡に対して行っている。

2 平成 20 年度事業の概要

平成 20 年度は、本調査がなくなり、試掘調査が 1 事業 3 地区、確認調査が 4 事業 6 遺跡を対象とした。確認調査のうち、4 遺跡が立会い調査で遺物の採集を主に行なったものである。堀割遺跡を除き、従前から計画していた事業であった。なお、整理作業については平成 19 年度同様継続したが、国道 403 号交通連携事業に伴う馬越遺跡の発掘調査報告書を刊行した。

3 平成 21 年度事業の概要

平成 21 年度においては開発事業が少なく、年度当初からは県営ほ場整備事業吉津川地区に伴う確認調査だけが予定されていた。古見道遺跡は工事中の連絡により、急遽対応したものである。緊急雇用事業では 1 遺跡、1 地区を対象に試掘・確認調査を行った。なお、整理作業については平成 20 年度同様継続したが、県営ほ場整備事業吉津川地区に伴う馬越遺跡の発掘調査報告書を刊行した。

年度	調査	遺跡名・地区名	遺跡の 主な時代	月												備考	
				4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3		
平成 19 年度	試掘	山鳥新田・五反刈地区				—				—							
	試掘	舞台遺跡周辺地								—							
	本調査	荒又遺跡	古墳 古代					—									本港未収載
	本調査	太田遺跡	古代						—								本港未収載
平成 20 年度	確認	陣ヶ峰遺跡	縄文 古代			—											
	確認	陣ヶ峰北遺跡	縄文 古代							—							
	確認 (立会い)	堀割遺跡・藤上村遺跡・ 西出河川遺跡	古代 中世								—						
	試掘	山鳥新田・加茂新田・ 敷森地区				—						—					
	確認 (立会い)	堀割遺跡														—	
平成 21 年度	確認	古見道遺跡	縄文 中世			—											
	確認 (立会い)	馬越遺跡・太田遺跡・ 荒又遺跡・新堀遺跡	古代 中世								—						
	試掘	下天行地区										—					緊急雇用事業 本港未収載
	確認	川向遺跡	縄文				—										緊急雇用事業 本港未収載

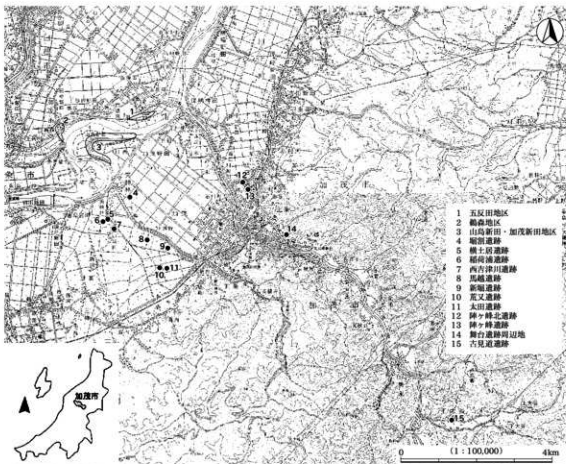
第 1 表 発掘調査工程表

4 遺跡の位置と環境 (第1図)

加茂市は新潟県の県央域に位置し、中越地区にあたる。地勢は東部に高さ1,000 mを超える粟ヶ岳、権ノ神岳などの山岳が聳え、粟ヶ岳を源とする加茂川が大谷川、高柳川などの支流を集め、谷底平野を縦貫し、信濃川に注いでいる。流域延長は約11kmを測る。

加茂川上流部は「七谷」地区と呼ばれ、加茂川及び支流が小規模な段丘を形成し、旧石器時代～縄文時代の遺跡が多く分布する一方、弥生～古代の遺跡は少なく、中世は山上に小規模な山城や信仰関連遺物が多く確認される特徴がある。加茂川が東山丘陵を抜けた現市街地帯は扇状地形であり、弥生時代後期後半頃に開発が開始され、古墳時代前期に一層開発が進行する状況が知られる。その後、若干の空白期間を挟み、奈良・平安時代により多くの遺跡が出現する様子が鮮明である。

古見遺跡は加茂川上流部の山間地で、大谷川右岸に立地する。陣ヶ峰遺跡と陣ヶ峰北遺跡は加茂川下流域右岸の扇状地端部付近に立地する縄文、古代の遺跡である。堀割遺跡、稲荷浦遺跡、横土居遺跡、西古津川遺跡、馬越遺跡、新堀遺跡、太田遺跡、荒又遺跡は下条川流域に展開した古代・中世を主体とする遺跡である。堀割遺跡が右岸で他は左岸域に立地する。舞台遺跡は加茂川右岸で、山城直下の低地に位置する。山島新田、五反田、加茂新田、鶴森の各地区は加茂市域北部の須田地域にあり、信濃川両岸域に位置する。須田地域で確認された遺跡は少なく、中世以前の遺跡は全く確認されていない。



第1図 調査対象遺跡・地区位置図 (S=1:100,000)

(国土地理院 平成2年発行 [加茂]・平成9年発行 [新潟]・平成4年発行 [弥生]・平成8年発行 [三集] S=1:50,000原図)

第二章 信濃川下流河川災害復旧等関連緊急事業関連

1 調査に至る経緯

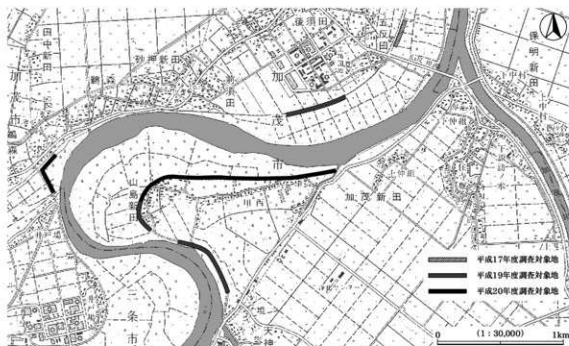
信濃川下流河川災害復旧等関連緊急事業は平成15年度以降、信濃川堤防強化対策事業として施工されてきたが、平成16年新潟・福島豪雨(7・13水害)により、復緊事業となり、施工範囲と工期短縮が計画された。本事業に対する埋蔵文化財の取扱いは、複数の市町村が関係した事業であることから、県教育庁文化行政課(以下、県文化行政課)主導の下に進められた。加茂市教育委員会(以下、市教委)では平成17年11月に、事業地内の現況観察を行い、試掘調査必要区域の検討を行った。その後、平成18年1月に、五反田地区の一部分について試掘調査を実施した〔伊藤2008b〕。

平成19年度、平成20年度ともに年度当初に協議を行い、各々占用地解除が行われ、用地の都合があったところから、工事着手前に試掘調査を行うこととした。平成19年度が五反田と山島新田地区、平成20年度が山島新田、加茂新田、鶴森地区が対象となった。

事務的な手続きは、平成19年度は河川敷地の一時占用届を平成19年6月11日付け民資第111号、平成19年9月28日付け民資第181号、平成20年2月22日付け民資第37号で信濃川下流河川事務所三条出張所長宛てに行った。合わせて埋蔵文化財発掘調査の報告を平成19年6月14日付け民資第115号、平成19年10月2日付け民資第185号、平成20年2月27日付け民資第42号で新潟県教育委員会教育長宛てに行い、調査の準備に入った。

調査年度	調査年度	調査年度	調査年度	調査年度		
平成18年(2006)	1.18	五反田	270m	20.5m ²	4	伊藤(2008b)
平成19年(2007)	6.14	山島新田	520m	36.5m ²	2	本音
平成19年(2007)	10.3	五反田	520m	64m ²	5	本音
平成20年(2008)	2.28	山島新田	250m	69.6m ²	4	本音
平成20年(2008)	5.13～5.15	山島新田 加茂新田	1,050m	129.8m ²	17	本音
平成20年(2008)	11.6～11.7	加茂新田	600m	63.4m ²	9	本音
平成21年(2009)	1.29～1.30	鶴森	450m	53m ²	8	本音

第2表 試掘調査履歴一覧



第2図 試掘調査対象地位位置図(S=1:30,000)

(国土地理院 平成14年発行「越後古田」・平成15年発行「矢代田」 S=1:25,000 基図)

2 五反田地区

(1) 調査対象地と試掘調査の概要 (第2～5図)

調査対象地は加茂市北西部の須田地区で、加茂市大字五反田地区内にある。信濃川左岸で堤防外地にあたる。現況は標高約6m前後の水田である。五反田村は慶長3年(1598)頃の新発田御領内高付帳で高168石6斗余と記され〔関1986〕、16世紀には成立していた本田村と見られる。五反田集落については、史料により第3図のとおり四段階以上、移転の歴史がある〔関1984〕。今回の調査対象区は寛文年間の囲い堤と明治の新上手との間に位置する。第4図の明治34年測量図には池状に描写されており、新上手築造の際に掘削された地点を含むものと見られる。なお、周辺には三枚田、大割向などの小字名が残る。

試掘調査は、平成19年10月3日に行った。延長520mの範囲を対象とした。重機により約3.0m×4.5mのトレンチを掘削し、遺構・遺物の検出及び土層堆積の確認を行った。必要な測量と写真撮影後、すぐに点圧しながら埋戻しを行った。合計で5トレンチ、約64m²の調査を行った。



第3図 五反田村移転略図
〔関1984〕から転載

(2) 層序 (第6図)

1～5トレンチとも類似した土層堆積状況である。I層耕作土、II層床土、III層以下には砂質土及び底植物層の堆積が顕著となる。掘削最大深度内においては、遺物包含層及び遺構確認面は確認できなかった。

(3) 遺構と遺物

遺構、遺物ともに確認できなかった。

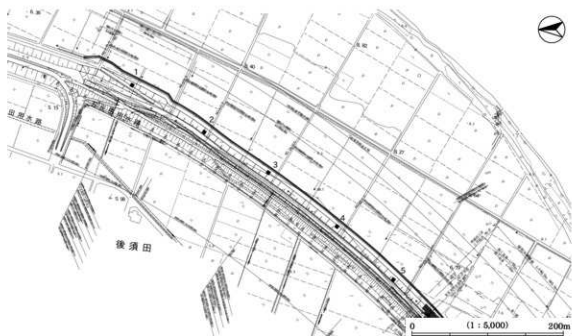
(4) 調査のまとめ

今回の調査対象区域における調査可能深度内においては、遺跡は確認されなかった。



第4図 明治34年信濃川測量図
(信濃川下流河川工事事務所提供)

0 (1:1,200) 500m



第5図 五反田地区試掘調査トレンチ位置図 (S=1:5,000)
(信濃川下流河川工事事務所提供平面図 S=1:1,000 原図)

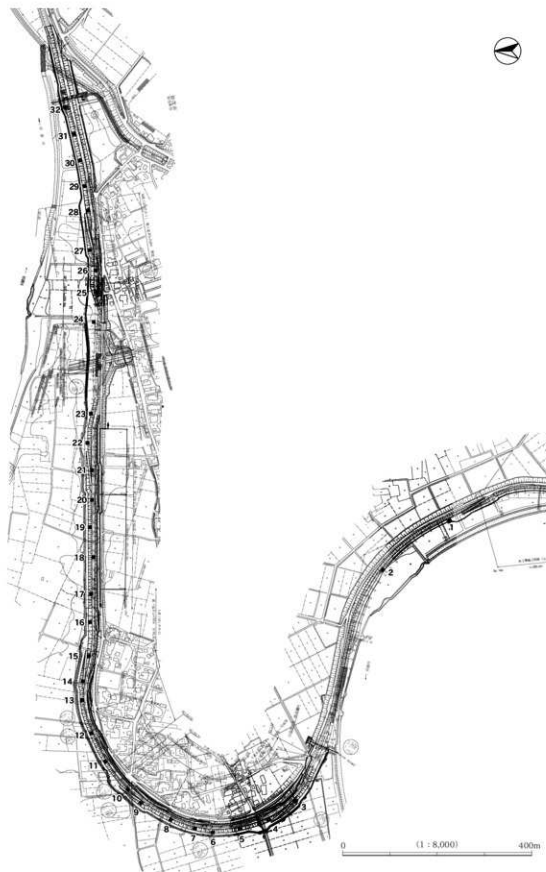


第6図 五反田地区試掘調査トレンチ土層柱状図 (S=1:40)

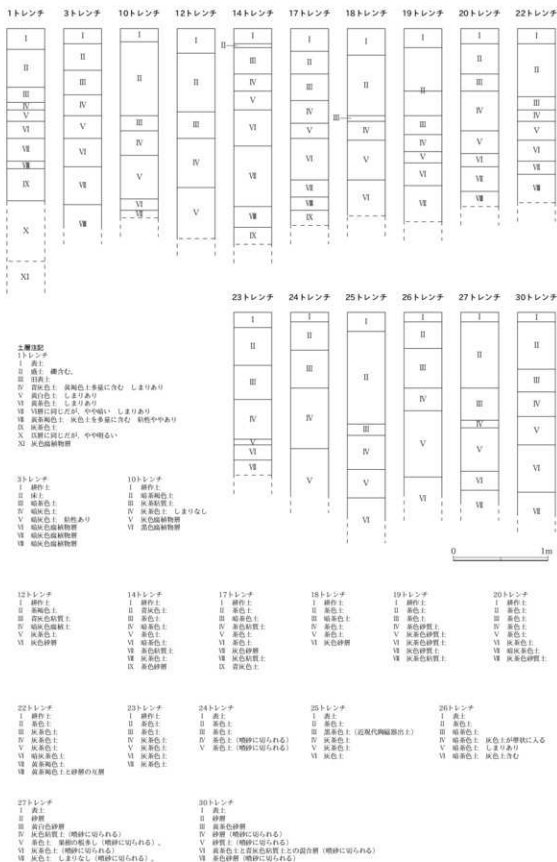
3 山島新田・加茂新田地区

(1) 調査対象地と試掘調査の概要 (第2・4・7図)

調査対象地は加茂市北西部で、加茂市大字山島新田及び加茂新田地内にある。信濃川右岸で堤防外側にあたる。信濃川が大きく蛇行し、流路に沿って緩やかなU字状に集落が形成されている。現況は標高約8～9m前後の水田や果樹畑である。山島新田は新発田藩領で、史料から慶安元年(1648)に開発立村と伝わる。現在は梨・桃の生産地として有名である。加茂新田は川西、住寺堀、諏訪ノ木、仲組などの集落があり、史料から寛永21年(1644)開発立村と伝わる。今回の調査対象区域は川西地区にあたる。明治34年測量図にはところにより池状に描写されており、新土手築造の際に掘削されたものと見られる。なお、



第7図 山島新田・加茂新田地区試掘調査トレンチ位置図 (S=1:8,000)
(仙臺川下流河川工事事務所提供平面図 S=1:1,000 参照)



第8図 山島新田・加茂新田地区試掘調査トレンチ土層柱状図 (S=1:40)

4 鶴森地区

周辺には、北から居掛下川原、小土居内、中野、居浦、箕輪などの小字名が残る。

試掘調査は、平成19年6月14日(1、2トレンチ)、平成20年2月28日(3～6トレンチ)、平成20年5月13日～15日(7～23トレンチ)、平成20年11月6日～7日(24～32トレンチ)の2カ年度、4次に渡り行われた。重機により約2.0m×4.0m、約3.0m×4.5m、約3.0m×6.0mのトレンチを掘削し、遺構・遺物の検出及び土層堆積の確認を行った。必要な測量と写真撮影後、すぐに点圧しながら埋め戻しを行った。調査は総延長2,420mを対象とし、合計で32トレンチ、約289.3m²である。

(2) 層序(第8図)

各区域でやや異なる土層堆積状況である。1層耕作土は共通するが、以下、盛土層が存在するところもある。概ね山島新田区域では底植物層が、川西区域では砂質土の堆積が顕著に見られた。掘削最大深度内においては遺物包含層及び遺構確認面は確認できなかった。なお、24、27、30トレンチの土層断面に砂脈の立ち上がりが確認でき、強い地震による噴砂と判断される。近世以降の地震によるものと考えられる。

(3) 遺構と遺物

遺構、遺物ともに確認できなかった。9トレンチのⅡ層、12トレンチのⅣ層及び25トレンチのⅢ層から近世～現代陶磁器が出土している。

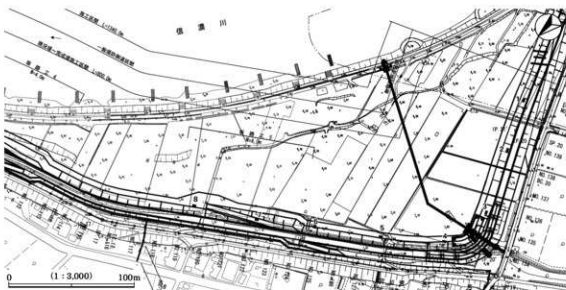
(4) 調査のまとめ

今回の調査対象区域における調査可能深度内においては、近世以前の遺跡は確認されなかった。

4 鶴森地区

(1) 調査対象地と試掘調査の概要(第2・4・9図)

調査対象地は加茂市西北部の須田地区で、加茂市大字鶴森地内にある。信濃川左岸で現堤防外地にあつた



第9図 鶴森地区試掘調査トレンチ位置図 (S=1:3,000)
(信濃川下流河川工事事務所提供平面図 S=1:1,000 参照)

る。現況は標高約8m前後の荒地である。慶長3年(1598)頃の新発田御領内高付帳に「鶴ノ森村」と記され、16世紀には成立していた本田村と見られる。今回の調査対象区周辺には江内、川原などの小字名が残る。

試掘調査は、平成21年1月29日～30日に行った。重機により約2.0m×4.0mのトレンチを掘削し、遺構・遺物の検出及び土層堆積の確認を行った。必要な測量と写真撮影後、すぐに点圧しながら埋め戻しを行った。合計で8トレンチ、約53m²の調査を行った。

(2) 層序 (第10図)

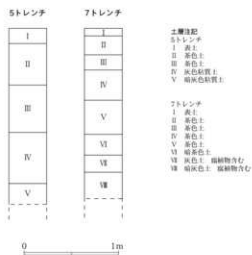
地点により異なる土層堆積状況であるが、概ね1層表土の下位には茶色土が厚く堆積し、河川堆積層はその下層に見られる。なお、5トレンチではⅢ～Ⅴ層を貫き、Ⅲ層中で終る地震による液化化現象に起因する噴砂が認められた。近世以降の地震によるものであろう。掘削最大深度内においては遺物包含層及び遺構確認面は確認できなかった。

(3) 遺構と遺物

遺構、遺物ともに確認できない。

(4) 調査のまとめ

今回の調査対象区域における調査可能深度内においては、遺跡は確認されなかった。



第10図 鶴森地区試掘調査トレンチ土層柱状図 (S=1:40)

第三章 農業基盤整備事業関連

1 調査に至る経緯

農業基盤整備事業に関連し、平成20年度1件、平成21年度1件、合計2件2遺跡の確認調査を実施した。

平成20年度の事業は加茂郷土地改良区が主体となり、延長270m間の現況土水路部分を重機で再掘削し、コンクリート2次製品の排水フリューム（400×600）を設置する改良事業である。事業が周知遺跡の掘削遺跡地内であることから、平成20年の11月下旬から協議を開始した。文化財保護法第93条第1項の規定による埋蔵文化財発掘の届出については、平成20年11月25日付け加土改第253号で加茂郷土地改良区理事長から、新潟県教育委員会教育長宛てに出された。市教委では掘削幅及び構造物の内容から確認立会い調査が必要と判断し、埋蔵文化財の発掘について平成20年11月25日付け民資第272号で新潟県教育委員会教育長宛てに意見を添えて提出した。同時に、事業者の確認立会い調査に向けて、工事施工業者との連絡調整を依頼した。

平成21年度の事業は想定外で、急遽対応に迫られたものである。平成21年4月24日の夕方に地元市議会議員から、「工事中に遺跡が出たようだ。施工業者と連絡するように。」との電話を頂き、翌25日に現地に急行したところ、周知遺跡である古見道遺跡地内で耕作者個人による水田の区画整理工事により、時期は不明ながら多数のピットなどの遺構が露出していることを確認した。そして関係者から5月の連休中には区画整理を終らせ、代掻きを行いたいことなどを伺い、事態は逼迫していることを認識した。直ちに県文化行政課の助言を仰ぎ、現況より掘削せずに保護盛土を行うことが可能であれば、本調査は不要とし、確認調査を市内遺跡の補助金事業費から捻出し、対応するとの見通しを得た。そこで、再び工事関係者と協議し、これ以上の掘削は回避し、表土として盛土を行うこと、数日は工事を休止することが可能であることを確認した。故に本調査ではなく露出した遺構の確認調査を行うこととし、調査体制を整えた。文化財保護法第93条第1項の規定による埋蔵文化財発掘の届出については、平成21年4月27日付けで施主から、新潟県教育委員会教育長宛てに出された。市教委では確認調査が必要と判断し、埋蔵文化財の発掘について、平成21年4月28日付け民資第91号で新潟県教育委員会教育長宛てに意見を添えて提出した。

2 掘削遺跡

(1) 遺跡と確認立会い調査の概要（第11図）

堀削遺跡は大字天神林地内で下条川右岸の沖積地に立地する。下条川と信濃川の合流部に近く、現況は標高約6m前後の水田が中心である。遺跡は平成7年に確認され、古代の遺物が表採されている。

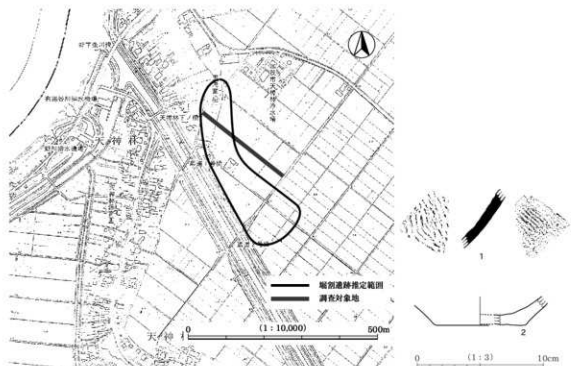
確認立会い調査は、平成21年3月13日～19日に行った。重機による掘削作業に市職員が1名張り付き、遺構・遺物の確認を行った。

(2) 出土遺物 (第12図)

古代の須恵器1点、土師器4点が採取できた。1は須恵器甕の体部片である。外面に平行タタキ、内面に同心円当て具痕が見られる新津丘陵窯跡産と見られる。2は土師器小甕の底部片である。底径は7.0cm、底部外面に回転糸切り痕が確認できる。詳細な時期は不明であるが、概ね平安時代頃の所産であろう。

(3) 調査のまとめ

現地表下約1mに黒色土層の堆積が見られ、古代の遺物包含層と把握される。平安時代頃に営まれた集落跡が周辺に展開する可能性が高い。



第11図 堀割遺跡推定範囲と調査対象地位置図 (S=1:10,000)
(加茂市 平成9年印刷 [加茂市街図] S=1:10,000 縮図)

第12図 堀割遺跡確認調査出土遺物

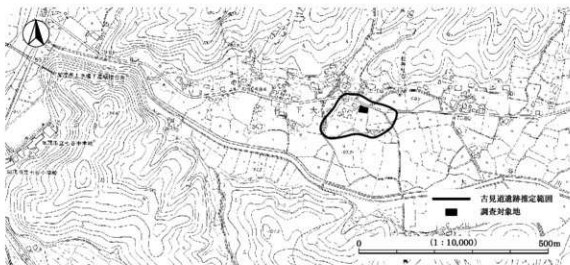
3 古見道遺跡

(1) 遺跡と確認調査の概要 (第13・14図)

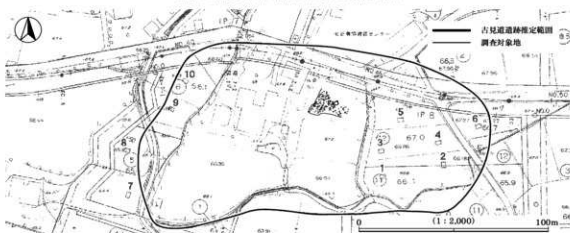
古見道遺跡は加茂市南部で山間地の下大谷地内にある。大谷川右岸の丘陵裾部に位置し、民家を中心として周辺の水田より3m程小高い、標高約67m前後である。調査地点の周辺部は既に県営ほ場整備事業により区画が改変されており、現状を留めていない。調査地点はそのほ場整備事業における区域外となっていた。

古見道遺跡は平成7年に縄文時代の遺跡として周知化され、県営ほ場整備事業に伴い確認調査が実施されている。今回の調査地点東側の水田も調査されたが、遺跡は確認されていない【伊藤2000】。

確認調査は、平成21年4月30日の1日で行った。すでに遺構確認面まで掘削が及んでいたので人力で遺構検出作業を行い、遺構の平面形を明確にした。その後、コンパクトなデジタルカメラ(600万画素)



第13図 古見道遺跡推定範囲と調査対象地位置図 (S=1:10,000)
 (加茂市 昭和52年修正 (加茂市全図10) S=1:5,000 复印)



第14図 古見道遺跡推定範囲と調査対象地位置図 (S=1:2,000)
 (〔伊藤 2000〕に加筆して転載)



第15図 古見道遺跡
 土層柱状図 (S=1:40)

第16図 古見道遺跡遺構全体略図 (S=1:200)

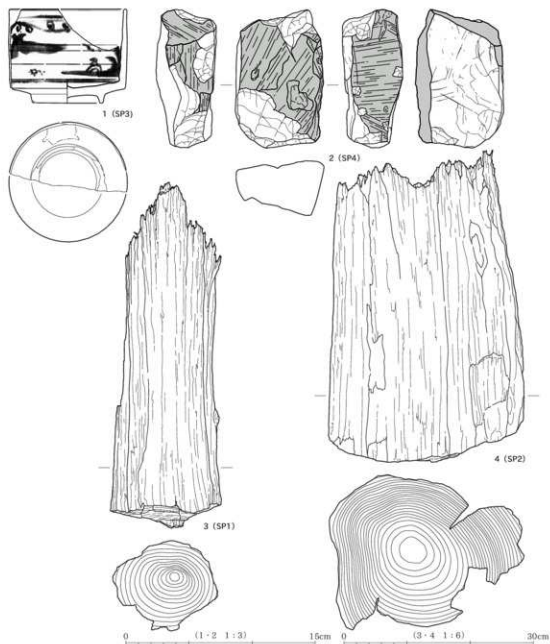
でピンホールを写し込みながら、各画面をラップさせるようにほぼ真上から撮影し、専門業者に委託してデジタル解析を施し、簡易な略平面図を作成した。あわせて遺物の検出と基本層序の確認を行った。調査面積は約150m²程である。

(2) 層序 (第15図)

基本層序はⅠ～Ⅲ層である。Ⅰ層が黒色土で水田面、Ⅱ層が黒褐色土、Ⅲ層が遺構確認面、地山で明オリーブ灰色粘質土である。遺物包含層は確認できない。

(3) 遺構と遺物 (第16・17図)

各遺構は確認面において黒褐色土を覆土とする。遺構の切り合いは少ない。調査は平面形の確認に留め



第17図 古見道遺跡確認調査出土遺物

ているため、その内容は不明なものが多いが、柱根が確認できる遺構が複数見られ、建物跡の存在が窺える。遺構は約 170 基確認されたが、ほとんどがピットで、確認面上では約 20 ～ 50cm の規模である。直径 200cm の大きな土坑が 1 基見られるが、井戸や塵穴の可能性が考えられよう。

遺物は少ない。1 は SP3 出土の近世磁器（初期伊万里）である。底部から体部がシャープに立ち上がる筒形碗である。高台皿付けを除き、全面に軸葉が施される。高台皿付けに離れ砂の付着が確認できる。文様はラフな山水文や唐草文が見られる。器形や文様から大橋編年Ⅱ・1 期（1610 ～ 1630 年代）〔大橋 1989・野上 2000〕に位置付けられよう。2 は SP4 出土の凝灰岩製の磁石、3・4 は柱根で、それぞれ SP1、2 出土である。両者とも芯持丸太で樹種はクリである。SP2 は直径 30cm と太い。

（4）調査のまとめ

今回の調査地点は、数少ない出土遺物からではあるが、17 世紀前半頃の集落跡の一部と推測される。直径 30cm を超える柱根からは特別な建物の存在も推測されるが、現状では判然としない。ただ、小字名「古見道」の道が堂からの変化とすれば、周辺にお堂や寺院などが存在した可能性もある。

第IV章 県営ほ場整備事業吉津川地区関連

1 調査に至る経緯

県営ほ場整備事業吉津川地区に伴う埋蔵文化財の取扱いについては平成10年から協議を行い、これまでに馬越遺跡、鬼倉遺跡、稲荷浦遺跡、横土居遺跡、西吉津川遺跡、新堀遺跡、荒又遺跡、太田遺跡、山通遺跡、新田川遺跡周辺地、吉津川遺跡周辺地、中谷地遺跡周辺地、安曲遺跡周辺地を対象に試掘・確認調査が実施されてきた〔伊藤1999・2001・2005〕。各遺跡の調査結果をもとに施工方法との調整を行い、面整備区域の切土を減らし、盛土工法を採用することで、排水路と用水パイプライン布設工事部分のみを本調査の対象とした。そして平成17年、18年度に馬越遺跡、19年度に荒又遺跡、太田遺跡の本調査を行った。その後、面整備工事が終了した区域から漸次、暗渠排水工事が行われ、掘削幅が狭いことから、確認立会い調査で対応することとなった。

平成20年度は横土居遺跡、稲荷浦遺跡、西吉津川遺跡が対象区域に存在することから、平成20年4月15日付け三振農第50号で埋蔵文化財発掘調査について（依頼）が出された。同時に同日付けで、三振農第52-1号、53-1号、54-1号で埋蔵文化財発掘の通知が新潟県教育委員会教育長宛てに出された。市教委はそれぞれ確認立会い調査が必要と判断し、埋蔵文化財の発掘について、平成20年4月17日付け民資第89号、90号、91号で新潟県教育委員会教育長宛てに意見を添えて提出した。その後、工事施工業者が決定した9月初めに協議を行い、工程や工事内容についての確認を行った。工程は稲刈り後で吸水渠管はトレンチャーによる掘削を行い、集水渠の吐口部については重機で掘削するが、幅1m未満であることなどを確認し、調査の準備に入った。

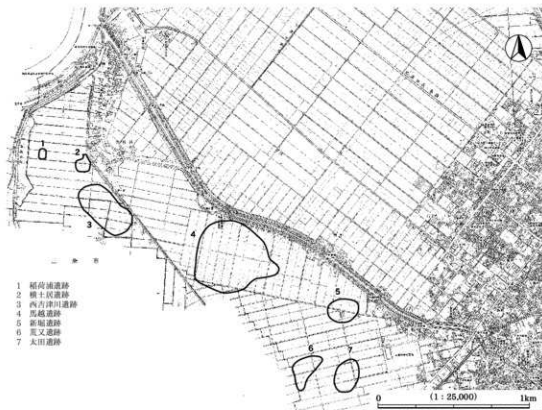
平成21年度は馬越遺跡、太田遺跡、荒又遺跡、新堀遺跡が対象区域に存在することから、平成21年4月21日付け三振農第92号で埋蔵文化財発掘調査について（依頼）が出された。同時に同日付けで、三振農第93号、94号、95号、96号で埋蔵文化財発掘の通知が新潟県教育委員会教育長宛てに出された。市教委はそれぞれ確認立会い調査が必要と判断し、埋蔵文化財の発掘について、平成21年4月24日付け民資第80号、81号、82号、83号で新潟県教育委員会教育長宛てに意見を添えて提出した。その後、工事施工業者が決定した9月下旬に協議を行い、工程や工事内容についての確認を行った。工程は稲刈り後からで工法は昨年度同様であることなどを確認し、調査の準備に入った。

以下、出土遺物が見られた遺跡について報告を行う。

2 西吉津川遺跡

(1) 遺跡と確認立会い調査の概要（第18回）

横土居遺跡、稲荷浦遺跡、西吉津川遺跡は加茂市北西部の天神林地区で、下条川左岸の沖積地に存在する。現況は標高約7m前後の水田である。3遺跡は各々平成7年に発見され、周知化されている。平成11年度に面整備工事に伴い確認調査が行われ、横土居遺跡、稲荷浦遺跡からは遺構、遺物ともに未検出であったが、西吉津川遺跡周辺から中世の遺物が出土した〔伊藤2000〕。また、西吉津川遺跡については三条



第18図 調査対象遺跡位置図 (S=1:25,000)
(加茂市 平成9年印刷 (加茂市街図) S=1:10,000参照)

市境にあり、市域を超えて展開している。三条市教育委員会により平成14年度に発掘調査が行なわれ、中世期の溝や井戸などが確認されている [田中ほか2006]。

調査は、業者の工事日程に沿う形で、平成20年10月4日～11月26日の間に行った。集水渠部分の掘削工事にはその都度立会い、遺構・遺物の検出及び土層堆積の確認を行った。暗渠管布設工事箇所については、適宜、トレンチャーによる掘削土から遺物の採集作業を行った。なお、稲荷浦遺跡地内からは遺構、遺物ともに確認できなかった。横土居遺跡地内からは遺構は確認できないが、中世の青磁片1点が採集された。

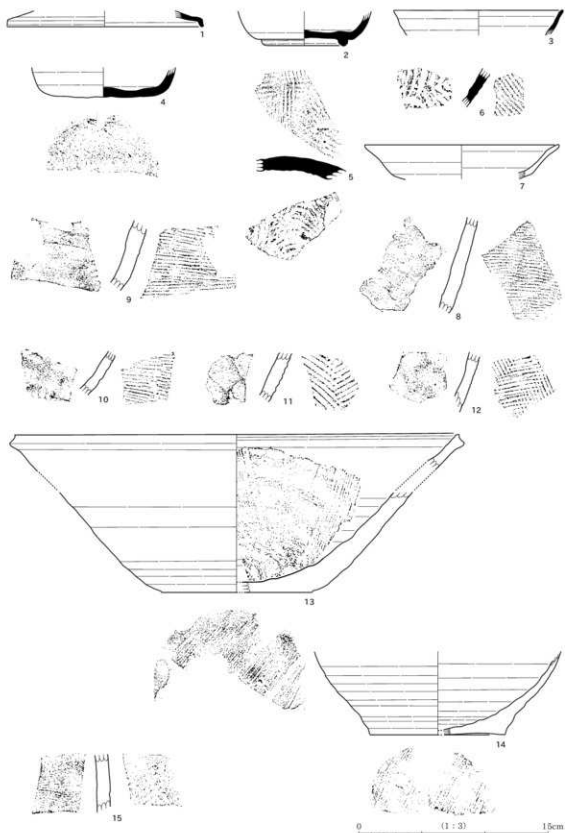
(2) 遺構と遺物 (第19図)

遺構は狭いトレンチャーなので、平面上では把握できないが、断面観察から溝、土坑などの遺構が数カ所で確認された。遺物は古代～中世の遺物が採集されている。

1～6は古代の須恵器である。1は杯蓋の口縁部で、端部は比較的しっかりと屈折する。2は有台杯で、短い高台を持つ。3、4は無台杯で、4は器壁の厚いつくりである。5は横瓶、6は甕の体部片である。7は手づくね成形の中世土師器皿である。8～14は中世の珠洲焼である。8～12は壺・甕の体部片で、外面に平行タタキメのもの(8～10)と綾杉状のもの(11・12)がある。13、14は播鉢である。13は内面に11条一単位の卸し目が比較的に認められる。口縁端部は中央部がやや凹む。底部外面は静止糸切り痕が残る。14は内面には卸し目は確認できない。底部外面は静止糸切り痕が残る。15は瓦質土器の鉢である。外面に花文スタンプが押捺される。内面にはハケメが見られる。近世以降のものであろう。

古代の土器は佐渡小泊窯跡産の2、3は9世紀代、他は器形などから8世紀後半頃と考えられる。中

世土師器は手づくねであることや器形から 15 世紀末～ 16 世紀初めに、珠洲焼は吉岡編年 [吉岡 1994] のⅡ～Ⅲ期を中心とし、一部 (11) はⅣ期に位置付けられる。



第 19 図 西吉津川遺跡出土遺物

(3) 調査のまとめ

西古津川遺跡は出土物から、古代～中世の集落遺跡である可能性が高い。今回の調査により、遺跡推定範囲が北西方向に拡大する形となった。特殊遺物などの出土は認められないが、下条川と信濃川の合流付近に立地する環境を考えると、流通に関係した集落跡であった可能性もあろう。

3 馬越遺跡

(1) 遺跡と確認立会い調査の概要 (第18図)

馬越遺跡は東山丘陵から北西方向に約2km離れた下条川左岸の沖積低地に立地する。現況は標高約6～7m前後の水田である。遺跡は平成7年に発見、周知化され、これまでに数度の大規模な発掘調査が行われ、古墳時代中期、古代、中世の集落跡が確認されている。特に古代においては荘園・官衙関連遺跡として、古代蒲原郡青海郷の地域経営の拠点遺跡と把握される加茂市を代表する遺跡である〔伊藤2010〕。

調査は、業者の工事日程に沿う形で、平成21年10月5日～11月9日の間に行った。調査方法は西古津川遺跡ほかと同様である。なお、新堀遺跡地内についても平成21年10月5日～10月30日の間に調査を行ったが、遺構、遺物ともに確認できなかった。

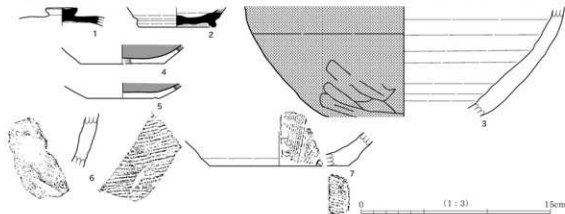
(2) 遺構と遺物 (第20図)

遺構は把握できなかったが、1箱分の遺物を採集した。1は須恵器杯蓋、2は須恵器有台杯で、1は新津丘陵窯跡産、2は佐渡小泊窯跡産である。3は土師器の鉢で、外面は赤彩される。4、5は黒色土器無台椀の底部である。4は底部外面に棒状黒斑が見られる。6は珠洲焼甕で細かいタタキメである。7は珠洲焼播鉢の底部片で、内面には比較的密な卸目が、底部外面には静止糸切り痕が見られる。

古代の土器は佐渡小泊窯跡産の存在や黒色土器などからVI期〔春日1999〕で、9世紀後半頃と考えられる。中世の珠洲焼は吉岡編年〔吉岡1994〕のIII期頃であろう。

(3) 調査のまとめ

馬越遺跡は出土物から、古代を中心とし、地点により中世の遺物が確認される。既往の調査結果と矛



第20図 馬越遺跡出土遺物

盾しない。遺跡は広範囲に展開しており、各時代の遺物出土傾向を把握することで集落の立地した場所や地形を考える手掛かりを得ることが可能となろう。

4 荒又遺跡

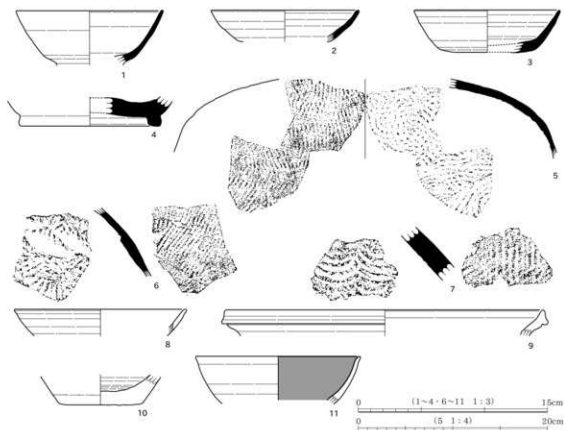
(1) 遺跡と確認立会い調査の概要 (第18図)

荒又遺跡は東山丘陵から北西方向に約1km離れた下条川左岸の沖積低地に立地する。現況は標高約6m前後の水田で、三条市域にかけて展開する。遺跡は当初、三条市の周知遺跡である安曲遺跡周辺地として扱われ、平成12年と15年に県営ほ場整備事業吉津川地区に係わる確認調査を実施した結果、確認された。平成19年の本調査の結果、古墳前期と古代の集落域の一部が検出されている〔伊藤2008a〕。

調査は、業者の工事日程に沿う形で、平成21年10月5日～11月10日の間に行った。調査方法は西吉津川遺跡ほかと同様である。

(2) 遺構と遺物 (第21図)

遺構は把握できなかったが、1箱分の遺物を採集した。1は須恵器有台杯で、焼成が甘く軽量感がある。2、3は須恵器無台杯である。2は口縁部が大きく外反する。3は器壁がやや厚く小振りである。1、2は佐渡小泊窯跡産、3は新津丘陵窯跡産と見られる。4は須恵器長頸瓶の底部である。幅広で短い高台が付く。5～7は須恵器甕である。4、6は佐渡小泊窯跡産、5は新津丘陵窯跡産、7は阿賀北の窯跡産であろう。8は土師器無台碗の口縁部片である。9は土師器長甕で、口端部中央は凹みやや下方につまみ出される。



第21図 荒又遺跡出土遺物

10は土師器小甕の底部、11は黒色土器無台椀で、内湾する器形である。

古代の土器は3がⅣ期で8世紀後半、他は佐渡小泊窯跡産の須恵器を含むことや器形などから、Ⅵ期で9世紀後半頃が主体と考えられる。

(3) 調査のまとめ

荒又遺跡では、それほど濃密ではないが、奈良・平安時代の出土遺物が確認され、既往の調査結果と矛盾しない。

5 太田遺跡

(1) 遺跡と確認立会い調査の概要 (第18回)

太田遺跡は東山丘陵から北西方向に約1km離れた下条川左岸の沖積低地に立地し、荒又遺跡と近接している。現況は標高約7m前後の水田である。太田遺跡の発見と周知化は、平成11年に新潟県県史研究所の池野氏により、「良」墨書土器を含む古代の土器が採集されたことを契機とする。その後、平成12年と15年に県営ほ場整備事業吉津川地区に係わる確認調査と平成19年に本調査が行われた。密度の高い遺構が検出され、出土遺物でも墨書土器を始め、ガラス玉や炭化米塊など特異なものが見られた〔伊藤2008a〕。

調査は、業者の工事日程に沿う形で、平成21年10月5日～10月29日の間に行った。調査方法は西吉津川遺跡ほかと同様である。

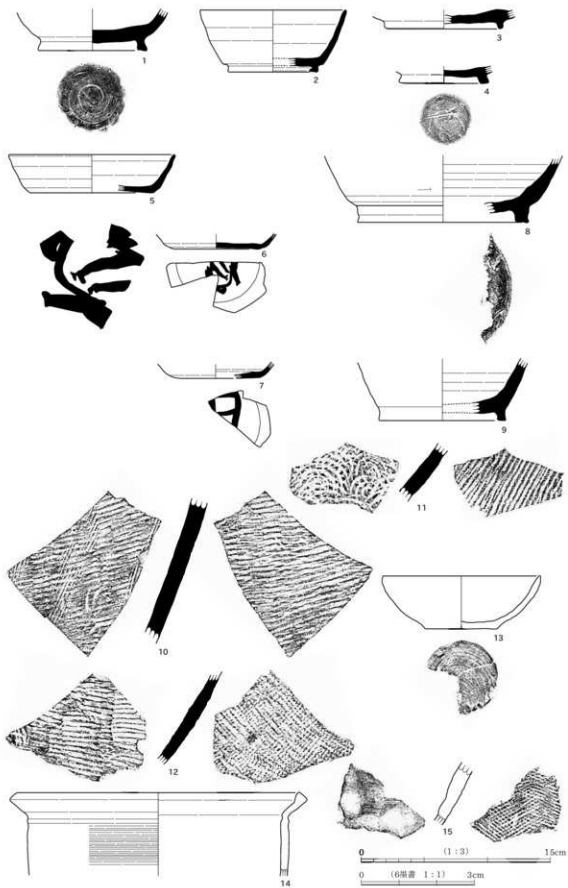
(2) 遺構と遺物 (第22回)

遺構は把握できなかったが、1箱分の遺物を採集した。1～4は須恵器有台杯である。1は厚手のつくりで、長い高台が付く。底部外面には右回転のヘラ切り痕が見られる。2は内傾した高台から直線的に体部が立ち上がる。3は短い高台が付く。底部外面にはヘラ切り痕が見られ、右回転である。4は外側に踏ん張るしっかりした高台である。底外面には右回転の糸切り痕と「一」のヘラ書きが見られる。胎土から、1は新津丘陵窯跡産、2、3は佐渡小泊窯跡産、4は頸城郡の窯跡産と考えられる。5～7は須恵器無台杯である。5は体部が直線的に立ち上がる器形である。6、7は底部外面に墨書が見られるが、どちらも判読できない。5～7はすべて佐渡小泊窯跡産である。8、9は須恵器長頸瓶である。ともに体部外面はロクロケズリされる。8は高台外面に板状圧痕、底部外面にヘラ書きが見られる。10～12は須恵器甕の体部片である。13は土師器無台椀である。粗雑なつくりで、体部は内湾する。底部外面には右回転の糸切り痕が見られる。14は土師器長甕で、口端部に面を持つ。15は珠洲焼甕で、綾杉状のタタキメである。

古代の土器は大半が佐渡小泊窯跡産であることや器形などからⅤ期、9世紀前半頃を中心とすると考えられる。

(3) 調査のまとめ

太田遺跡では、今回の暗渠工事で多量の遺物が出土した。これは、遺跡が地形の安定した環境に立地し、遺物包含層が比較的浅いところに存在することと関係しよう。遺物の主体は平安時代のものである。少量ではあるが中世の遺物が見られることは注意する必要がある。



第 22 図 太田遺跡出土遺物

第V章 民間開発関連

1 調査に至る経緯

平成19年度は宅地造成工事に係り、1件の試掘調査、平成20年度は集合住宅新築工事に係り、2件の確認調査を行った。

平成19年度は(株)エステートコンサルタントが主体となる宅地造成工事に伴う調査である。平成19年8月に事業者から、事業予定地における埋蔵文化財の有無などについて照会を受けた。予定地は周知遺跡の舞台遺跡に近接し、開発面積も約6,570㎡と大きいことから試掘調査をお願いする方向で協議を重ねた。その後、事業者から試掘調査の同意を得たが、早急な試掘調査終了を要望された。同時期に下条地区では場整備事業に伴う本調査を実施中であつたが、日程を調整し、試掘調査を早期に行うこととした。市教委は、(株)エステートコンサルタントから平成19年9月6日付けで土地所有者の承諾書もらい、平成19年9月7日付け民資第170号にて文化財保護法第99条第1項の規定による埋蔵文化財発掘調査の報告について新潟県教育委員会教育長宛てに提出し、調査の準備に入った。

平成20年度の2件はともに(株)大東建託が仲介する集合住宅新築工事に伴うものである。平成20年5月に事業者から陣ヶ峰地内2地点について埋蔵文化財包蔵地の有無の照会があり、どちらも周知遺跡の範囲に含まれることから、届出と確認調査が必要と返答した。

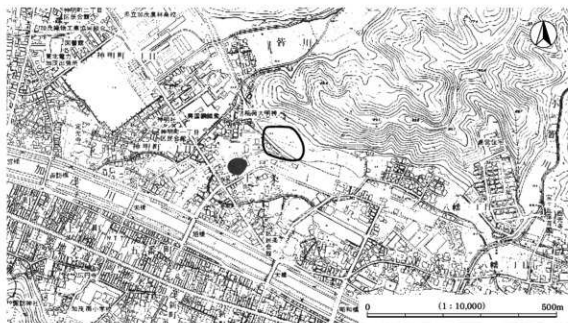
しかし、数日後に陣ヶ峰遺跡地内の工事計画地の施主から市教委に「埋蔵文化財試掘について」の文書が提出された。それによれば、計画地が軟弱であることから、試掘調査が原因により建物が沈下する可能性を憂慮し、試掘に同意できないという内容であつた。市教委は県文化行政課の見解を仰ぎながら、確認調査は建築物への影響が及ばない駐車場計画部分のみを対象とし、埋め戻しは川砂を入れてしっかり行うことなどを条件に再三、事業者を通じ協議を重ねた。そして、一端は施主の同意書もらい、平成20年6月5日に確認調査を行う諸準備に入ったが、調査前日に施主の意向により延期せざるを得ない形となった。さらに、施主への説明とお願いを続け、何とか了解を得ることができ、一週間後の6月12日に調査に入ることとなった。陣ヶ峰北遺跡地内においても同様の条件で説明とお願いを行い、施主から了解を得た。

文化財保護法第93条第1項の規定による埋蔵文化財発掘の届出については、平成20年5月1日付けと平成20年10月1日付けでそれぞれ施主から、新潟県教育委員会教育長宛てに出された。市教委ではそれぞれ確認調査が必要と判断し、埋蔵文化財の発掘について平成20年5月21日付け民資第126号及び平成20年10月7日付け民資第232号で新潟県教育委員会教育長宛てに提出した。その後、関係者と調整を行い、文化財保護法第99条第1項の規定による埋蔵文化財発掘調査の報告について、平成20年6月9日付け民資第142号及び平成20年10月8日付け民資第233号で新潟県教育委員会教育長宛てに提出した。

2 舞台遺跡周辺地

(1) 調査対象地と試掘調査の概要 (第23・24図)

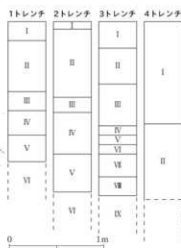
調査対象地は舞台遺跡推定範囲の西側約50m程の距離にある。舞台遺跡は加茂川右岸で、上桑城跡が立地する丘陵眼下の沖積地に展開する中世前期の遺跡である。平成8年に市道建設工事に伴う発掘調査が行われ、2条の河川跡を中心に、井戸や柱穴など集落の一部が確認されている。



第23図 舞台遺跡推定範囲と調査対象地位置図 (S=1:10,000)
(加茂市 平成9年印刷 [加茂市街図] S=1:10,000 原図)



第24図 舞台遺跡周辺地試掘調査トレンチ位置図 (S=1:1,500)
(株) エステートコンサルタント提供 S=1:500 原図)



土層表記	1トレンチ	2トレンチ	3トレンチ	4トレンチ
I 1-2トレンチ	I 黄土	I 黄土	I 黄土	I 黄土・礫層
II 礫土	II 礫土	II 礫土	II 礫土	II 礫土
III 赤色粘質土	III 赤色粘質土	III 赤色粘質土	III 赤色粘質土	III 赤色粘質土
IV 赤色粘質土	IV 赤色粘質土	IV 赤色粘質土	IV 赤色粘質土	IV 赤色粘質土
V 稲刈茶色土	V 稲刈茶色土	V 稲刈茶色土	V 稲刈茶色土	V 稲刈茶色土
VI 稲刈茶色土	VI 稲刈茶色土	VI 稲刈茶色土	VI 稲刈茶色土	VI 稲刈茶色土
VII 稲刈茶色土	VII 稲刈茶色土	VII 稲刈茶色土	VII 稲刈茶色土	VII 稲刈茶色土
VIII 稲刈茶色土	VIII 稲刈茶色土	VIII 稲刈茶色土	VIII 稲刈茶色土	VIII 稲刈茶色土
IX 稲刈茶色土	IX 稲刈茶色土	IX 稲刈茶色土	IX 稲刈茶色土	IX 稲刈茶色土

第25図 舞台遺跡周辺地試掘調査トレンチ土層柱状図 (S=1:40)

試掘調査は、平成 19 年 9 月 10 日に行われた。工事予定面積約 6,570m²のうち、概ね道路建設予定地を対象とし、約 3.0×4.5m のトレンチを 4 カ所設定した。遺構・遺物の検出および層序の確認を実施し、必要な計測と写真撮影後、点圧しながら埋め戻しを行った。調査面積は約 43m²である。

(2) 層序 (第 25 図)

各トレンチにおいて客土(盛土)が厚く堆積し、その下位に旧水田耕作土が確認できる。4 トレンチは擾乱が著しい。調査対象地は旧来製材所の工場として利用されており、その造成時に土地の改変が行われたことが推測される。耕作土の下層には粘性土が厚く堆積する。

(3) 遺構と遺物

遺構・遺物ともに確認できない。

(4) 調査のまとめ

今回の調査対象区域における調査可能深度内においては、遺跡は確認されなかった。

3 陣ヶ峰遺跡

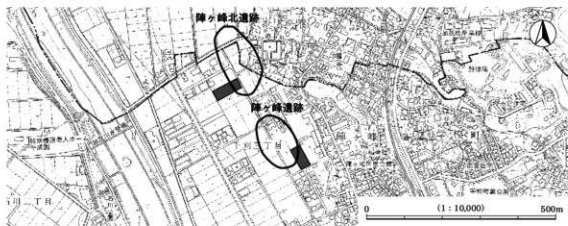
(1) 調査対象地と確認調査の概要 (第 26・27 図)

陣ヶ峰遺跡は平成 7 年に周知化された、加茂川右岸の沖積地に展開する古代の遺跡である。現況は標高 8m 前後の水田である。調査対象地は遺跡推定地の南東部にあたる。

確認調査は、平成 20 年 6 月 12 日に行われた。工事予定面積約 1,940m²のうち駐車場建設予定地を対象とし、約 2.0×3.5m のトレンチを 2 カ所設定した。遺構・遺物の検出および層序の確認を実施し、必要な計測と写真撮影後、川砂を充填し点圧しながら埋め戻しを行った。調査面積は約 15m²である。

(2) 層序 (第 28 図)

基本層序は I～VI 層まで確認したが、I 層耕作土より下位においては腐植物や砂質土が堆積し、河川氾濫などによる堆積環境が推測される。遺物包含層及び遺構確認面は確認されていない。

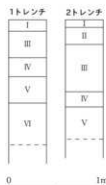


第 26 図 陣ヶ峰遺跡・陣ヶ峰北遺跡推定範囲と調査対象地位置図 (S=1:10,000)

(加茂市 平成 9 年印刷 (加茂市街図) S=1:10,000 原図)



第27図 陣ヶ峰遺跡確認調査トレンチ位置図 (S-1:2,500)
(加茂市 平成9年印刷 (加茂市街図) S-1:2,500 縮図)



土層記号
I 耕作土
II 暗褐色土
III 暗褐色土・腐植物含む
IV 褐色土・腐植物含む
V 灰色砂土
VI 灰色粘土・腐植物含む

第28図 陣ヶ峰遺跡確認調査トレンチ土層柱状図 (S-1:40)

(3) 遺構と遺物

遺構・遺物ともに確認できない。

(4) 調査のまとめ

今回の調査対象区域における調査可能深度内においては、遺跡は確認されなかった。

4 陣ヶ峰北遺跡

(1) 調査対象地と確認調査の概要 (第26・29図)

陣ヶ峰北遺跡は平成7年に周知化された、加茂川右岸の沖積地～丘陵裾部に展開する縄文・古代の遺跡である。現況は標高8m前後の水田である。平成8年に携帯電話用鉄塔建設工事に伴い発掘調査が行われている。調査対象地は遺跡推定地の南西部にあたる。

確認調査は、平成20年10月9日に行われた。工事予定面積約1,510m²のうち駐車場建設予定地を対象とし、約2.0×3.5mのトレンチを2カ所設定した。遺構・遺物の検出および層序の確認を実施し、必要な計測と写真撮影後、川砂を充填し点圧しながら埋め戻しを行った。調査面積は約15m²である。

(2) 層序 (第30図)

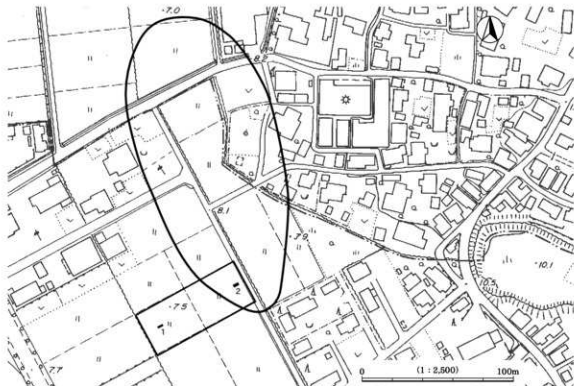
基本層序はI～VII層まで確認したが、I層耕作土より下位においては腐植物や砂質土が堆積し、河川氾濫などによる堆積環境が推測される。遺物包含層及び遺構確認面は確認されていない。

(3) 遺構と遺物 (第31図)

遺構は確認できなかった。遺物は1トレンチのⅦ層から1点出土した。1は古代の須恵器甕である。外面は自然釉で覆われる。内面には同心円当て具痕が見られる。新津丘陵窯跡産であろう。

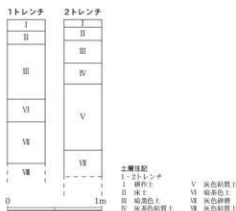
(4) 調査のまとめ

今回の調査対象区域における調査可能深度内においては、遺構は確認されなかった。1トレンチ出土の須恵器は周辺部からの流れ込みの可能性があろう。



第29図 陣ヶ峰北遺跡確認調査トレンチ位置図 (S-1:2,500)

(加茂市 平成9年印刷 (加茂市街図) S-1:2,500 縮刷)



第30図 陣ヶ峰北遺跡確認調査土層柱状図 (S-1:40)



第31図 陣ヶ峰北遺跡確認調査出土遺物

第VI章 古見道遺跡の自然科学分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

1 はじめに

本報告は、古見道遺跡（新潟県加茂市下大谷）の確認調査で出土した柱根の年代および樹種の検討を目的として実施した自然科学分析調査結果である。本遺跡の発掘調査では、遺構確認面まで水田面（I層）、黒褐色土（II層）、明オリーブ灰色粘質土からなる堆積層が確認されており、III層が遺構確認面とされている。遺構確認面からはピットや土坑が検出されており、近世磁器が出土したことから、近世初期頃の集落の一部と推定されている。

2 放射性炭素年代測定

(1) 試料

試料は、柱穴（SP1、2）内より出土した柱根であり、資料を参考とするといずれも芯持材と判断される。分析試料は、柱根より採取された木片であり、後述する樹種同定試料の採取と同時に観察を行い、同試料内の年輪外側より採取している。

(2) 分析方法

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後 HCl による炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOH による腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HCl によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理）。試料をバイコール管に入れ、1g の酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにて CO₂ を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO₂ と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650℃ で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした ¹³C-AMS 専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に ¹³C/¹²C の測定も行うため、この値を用いて δ ¹³C を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma; 68%）に相当する年代である。暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

3 樹種同定

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い(¹⁴Cの半減期5,730±40年)を較正することである。暦年較正は、CALIB 5.0.2のマニュアルにしたがい、1年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値に基づき、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。暦年較正結果は、測定誤差 σ 、 2σ (σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲)の値を示す。較正された暦年代は、将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表された値を記す。表中の相対比(確率分布)とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

(3) 結果

柱根の同位体効果による補正を行った測定結果(補正年代)は、SP1柱根が370±30yrBP、SP2柱根が330±30yrBPである(第3表)。また、これらの補正年代に基づく暦年較正結果(測定誤差 σ)は、SP1柱根がcalAD1,454-calAD1,618、SP2柱根がcalAD1,515-calAD1,635である(第4表)。以上の結果を参考とすると、SP1柱根は15世紀中頃～17世紀前葉、SP2柱根は16世紀前葉～17世紀前半という暦年較正年代が推定される。

試料		種類	暦正年代 (yrBP)	$\delta^{13}C$ (‰)	測定年代 (yrBP)	測定機番 Code
通称名 / サンプル名	部位					
SP1 柱根	(芯材材)	木片	370 ± 30	-24.66 ± 0.55	370 ± 30	IAAA-90898
SP2 柱根	(芯材材)	木片	330 ± 30	-24.69 ± 0.80	350 ± 30	IAAA-90899

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を用いた。
2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

第3表 放射性炭素年代測定結果

試料名	暦正年代 (暦年較正後) (yrBP)	暦年較正年代 (cal)			相対比	測定機番 Code	
		σ	2σ				
SP1 柱根 木片 (コア)	373 ± 30	σ	cal AD 1,454 - cal AD 1,516	cal BP 406 - 434	0.743	IAAA-90898	
		2σ	cal AD 1,595 - cal AD 1,618	cal BP 355 - 332	0.258		
SP2 柱根 木片 (コア)	325 ± 30	σ	cal AD 1,446 - cal AD 1,527	cal BP 504 - 423	0.597		IAAA-90899
		2σ	cal AD 1,555 - cal AD 1,633	cal BP 395 - 317	0.403		
		σ	cal AD 1,515 - cal AD 1,599	cal BP 435 - 351	0.816		
		2σ	cal AD 1,617 - cal AD 1,635	cal BP 333 - 315	0.184		
			cal AD 1,480 - cal AD 1,544	cal BP 470 - 390	1.000		

1) RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.0© (Copyright 1999-2005 M Stuiver and P.J. Reimer) を使用
2) 計算には真に示した丸の前の値を使用している。
3) 暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算と比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
4) 相対比は、真の値が入る確率 σ は68%、 2σ は95%である。
5) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比を相対的に示したものである。

第4表 暦年較正結果

3 樹種同定

(1) 試料

試料は、放射性炭素年代測定を行った柱根2点(SP1柱根、SP2柱根)である。

(2) 分析方法

剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柁目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を製作し、ガム・クロラール(抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレバラートを作製する。生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、[島地・伊東 1982] や [Wheeler 他 1998] を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、[林 1991] や [伊東 1995・1996・1997・1998・1999] を参考にする。

(3) 結果

柱根 2 点は、いずれも落葉広葉樹のクリに同定された。以下に、解剖学的特徴等を記す。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

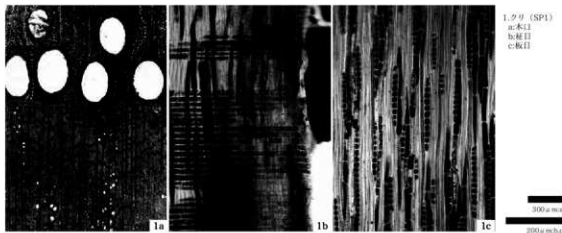
環孔材で、孔部は 3-4 列、孔部外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15 細胞高。

(4) 考察

柱根 2 点はいずれもクリであった。クリは、重硬で強度が高く、腐りにくい材質を有することから、柱材に適した木材と言える。なお、発掘調査所見や上記した暦年較正結果から推定される時期の柱材に関する調査事例は、新潟県内では東原町遺跡(柏崎市)や大坪遺跡(阿賀野市)等が挙げられ、これらの遺跡では近世の柱材にクリが確認されている [バリノ・サーヴェイ株式会社 2005、三村 2006]。

引用文献

- 林 昭三 1991 『日本産木材 顕微鏡写真集』 京都大学木質科学研究所
 伊東隆夫 1995 『日本産広葉樹材の解剖学的記載 I』 『木材研究・資料』 31 p81-181 京都大学木質科学研究所
 伊東隆夫 1996 『日本産広葉樹材の解剖学的記載 II』 『木材研究・資料』 32 p66-176 京都大学木質科学研究所
 伊東隆夫 1997 『日本産広葉樹材の解剖学的記載 III』 『木材研究・資料』 33 p83-201 京都大学木質科学研究所
 伊東隆夫 1998 『日本産広葉樹材の解剖学的記載 IV』 『木材研究・資料』 34 p30-166 京都大学木質科学研究所
 伊東隆夫 1999 『日本産広葉樹材の解剖学的記載 V』 『木材研究・資料』 35 p47-216 京都大学木質科学研究所
 三村昌史 2006 『大坪遺跡出土木製品の樹種』 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 153 集 一般国道 49 号安田バイパス関係発掘調査報告書 I 大坪遺跡』 p98-103 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
 バリノ・サーヴェイ株式会社 2005 『木製品樹種同定及び鉄滓成分分析』 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 140 集 一般国道 8 号柏崎バイパス関係発掘調査報告書 III 東原町遺跡・下沖北遺跡』 p47-54 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
 島地 謙・伊東隆夫 1982 『図説木材組織』 p176 地球社
 Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編) 1998 『広葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト』 p122 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修) 海青社。 [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification]



第 32 図 木材

第七章 ま と め

本書に収録した試掘・確認調査は、平成19年度が1遺跡周辺地、2地区、平成20年度が6遺跡、3地区、平成21年度が5遺跡を対象としている。信濃川下流河川災害復旧等関連緊急事業、県営ほ場整備事業など広域で施工される工事があるため、対象とした遺跡や調査地も多くなっている。大きな事業は平成21年度で終息しており、今後は小規模な開発行為に伴う調査が中心となることが予想される。以下、主な調査の概要について記す。

五反田・山島新田・加茂新田・鶴森地区 信濃川左岸の五反田、鶴森地区と信濃川右岸の山島新田、加茂新田地区は文献上からの開発立村の時期は16～17世紀頃と見られているが、ともに調査掘削深度内においては近世以前の遺跡は確認されなかった。調査対象区域は明治34年測量図から見ると、新土手築造に際し、大きく削平され、池状になったところも多い。

堀割遺跡 下条川右岸の沖積地に立地した平安時代の集落跡と見られる。現地表から約1m下に黒色土の遺物包含層が存在する。

古見道遺跡 本遺跡は縄文時代の遺跡として周知されていたが、今回、不時発見の調査ではあったが、夥しい柱穴などの遺構が確認され、出土した17世紀初頭頃の肥前磁器から近世の集落跡と推測された。出土した2点の柱根について自然科学分析を実施し、樹種はクリで、年代測定の補正年代値も磁器の年代観と大きく矛盾しない結果が得られている。SP2の柱根は径30cmと太く、小字名の「ふるみどう」からも一般的な建物以外の用途が推測される。どちらにしても近世遺跡は、現集落と重複している可能性が高く、現状から様相を把握することが困難であるが、今回僅かではあるが近世遺跡の一端が把握できた意義は少なくないであろう。この遺跡は慶長～寛永の時期に営まれたと推測されるが、慶長3年(1598)の上杉景勝会津移封の後、七谷地域は本庄城主の村上頼勝の領地となったが、元和4年(1618)に堀氏分家の堀直奇領となっている〔佐藤2008〕。本遺跡はその激動の時期に営まれており、地域史を形成する貴重な事例となろう。

西吉津川遺跡 出土遺物から13～14世紀を中心とした中世期が主体の遺跡である。他には奈良時代の土器も出土し、8世紀後半には開発された遺跡であることが知られる。

馬越遺跡 出土した土器は、古代～中世のもので、既往の発掘調査で出土した土器と同様である。下条川左岸一帯に展開する遺跡の一端を示している。

荒又遺跡 奈良～平安時代の土器が出土した。時期は8世紀後半～9世紀後半頃である。

太田遺跡 大型破片を含め多くの土器が出土した。現地表面から浅いところに遺物包含層が存在することを示している。僅かに中世の土器が見られるが、大半が9世紀前半に位置付けられる。第22図4の須恵器有台杯は器形や胎土の特徴から頸城郡の窯跡産と推測され、鬼倉遺跡、馬越遺跡と同じく、数点ではあるが土器の組成に含まれることが理解される。

舞台遺跡周辺地 中世前期が主体の舞台遺跡に隣接した区域であったが、遺跡は存在しなかった。

陣ヶ峰遺跡 今回の調査地点からは遺跡は確認されなかった。

陣ヶ峰北遺跡 古代の須恵器破片が1点出土したが、遺構は確認できず、周辺部からの流入した可能性が高い。遺跡の中心は調査地点から北部に展開すると推測される。

このように本報告の個々の調査成果はささやかなものであるが、それぞれが加茂地域史にとって重要な情報であり、正確な記録と報告が求められるものと認識し、今後の調査に備えたい。

引用・参考文献

- イ 伊藤秀和 1997 『加茂市における中世の遺跡について(二)―須田地区発見の遺物の紹介―』『加茂郷土誌』第19号 加茂郷土調査研究会
- 伊藤秀和 1999 『加茂市文化財調査報告(9) 平成10年度加茂市内遺跡確認調査報告書―たて屋敷遺跡 蚊口太遺跡 草生津遺跡 伝湧泉寺跡遺跡 大塚遺跡 馬越遺跡 鬼倉遺跡―』加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 2000 『加茂市文化財調査報告(11) 平成11年度加茂市内遺跡確認調査報告書―たて屋敷遺跡 古見道遺跡 中沢遺跡 岩野原A遺跡 馬寄遺跡周辺地 山伏塚遺跡 舞台遺跡 横土居遺跡 稲荷裏遺跡 西吉津川遺跡 天神林地内―』加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 2001 『加茂市文化財調査報告(12) 平成12年度加茂市内遺跡確認調査報告書―新田川遺跡周辺地 山通遺跡 中谷地遺跡周辺地 安曲遺跡周辺地 吉津川遺跡周辺地 新福遺跡 馬越遺跡―』加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 2005 『加茂市文化財調査報告(15) 平成15年度加茂市内遺跡確認調査報告書―西吉津川遺跡 馬越遺跡 太田遺跡 寺下遺跡 城下遺跡 伝下屋敷館跡 割沢遺跡 中沢遺跡―』加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 2008a 『荒丈遺跡・太田遺跡発掘調査速報』『加茂郷土誌』第30号 加茂郷土調査研究会
- 伊藤秀和 2008b 『加茂市文化財調査報告(17) 平成17年度・平成18年度加茂市内遺跡確認調査報告書―丸湯遺跡 五反田地区 中沢遺跡 草生津遺跡―』加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 2010 『加茂市文化財調査報告(19) 泉宮吉津川地区ほ場整備事業及び送ガス管移設工事に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書 馬越遺跡Ⅲ』加茂市教育委員会
- オ 大橋康二 1989 『考古学ライブラリー 55 肥前陶磁』ニュー・サイエンス社
- 大橋康二 1994 『古伊万里の文様―初期肥前磁器を中心に―』理工学社
- 小山正忠・竹原秀雄 1997 『新版標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修
- カ 春日真実 1999 『第4章-第2節 土器編年と地域性』『新潟県の考古学』高志書院
- サ 佐藤賢次 2008 『第1章 領主の支配 第1節・第2節』『加茂市史 資料編2 近世』加茂市
- セ 関 正平 1984 『流れ所克服の碑 五反田の移民碑』『図解 にいが歴史散歩<三条・燕・加茂>』新潟日報事業者出版部
- 関 正平 1986 『加茂市』『新潟県の地名』日本歴史地名体系第15巻 平凡社
- タ 田中恵美子¹⁾ 2006 『三条市文化財調査報告書第15号 西吉津川遺跡・白山B遺跡・府敬遺跡―泉宮ほ場整備事業吉津川地区に伴う埋蔵文化財調査報告書―』三条市教育委員会
- ノ 野上建紀 2000 『磁器の編年(色絵以外) 1. 碗・小皿・皿・紅皿・紅猪口』『九州磁器の編年―九州近世陶磁学会10周年記念―』九州近世陶磁学会
- ミ 水澤幸一 2005 『越後の中世土器』『新潟考古』第16号 新潟県考古学会
- ヨ 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館

別表6 馬越藩跡 土器類群表

群別	品名	形状	高さ	口径	底径	口縁径	口縁厚	底厚	重量	出土層	出土位置	出土時期	出土状況	備考
200	1	磁器鉢	11.5	2.5	2.5	15.50	0.8	0.5	1.50	100g	馬越 馬越	1000 年頃	1000 年頃	馬越
200	2	磁器鉢	11.00	6.0	6.0	15.50	0.8	0.5	1.50	100g	馬越 馬越	1000 年頃	1000 年頃	馬越
200	3	磁器鉢	11.00	6.0	6.0	15.50	0.8	0.5	1.50	100g	馬越 馬越	1000 年頃	1000 年頃	馬越
200	4	磁器鉢	11.00	6.0	6.0	15.50	0.8	0.5	1.50	100g	馬越 馬越	1000 年頃	1000 年頃	馬越
200	5	磁器鉢	11.00	6.0	6.0	15.50	0.8	0.5	1.50	100g	馬越 馬越	1000 年頃	1000 年頃	馬越
200	6	磁器鉢	11.00	6.0	6.0	15.50	0.8	0.5	1.50	100g	馬越 馬越	1000 年頃	1000 年頃	馬越
200	7	磁器鉢	11.00	6.0	6.0	15.50	0.8	0.5	1.50	100g	馬越 馬越	1000 年頃	1000 年頃	馬越

別表7 熊ヶ渡跡 土器類群表

群別	品名	形状	高さ	口径	底径	口縁径	口縁厚	底厚	重量	出土層	出土位置	出土時期	出土状況	備考
210	1	磁器鉢	11.5	2.5	2.5	15.50	0.8	0.5	1.50	100g	熊ヶ渡 熊ヶ渡	1000 年頃	1000 年頃	熊ヶ渡
210	2	磁器鉢	11.5	2.5	2.5	15.50	0.8	0.5	1.50	100g	熊ヶ渡 熊ヶ渡	1000 年頃	1000 年頃	熊ヶ渡
210	3	磁器鉢	11.5	2.5	2.5	15.50	0.8	0.5	1.50	100g	熊ヶ渡 熊ヶ渡	1000 年頃	1000 年頃	熊ヶ渡
210	4	磁器鉢	11.5	2.5	2.5	15.50	0.8	0.5	1.50	100g	熊ヶ渡 熊ヶ渡	1000 年頃	1000 年頃	熊ヶ渡
210	5	磁器鉢	11.5	2.5	2.5	15.50	0.8	0.5	1.50	100g	熊ヶ渡 熊ヶ渡	1000 年頃	1000 年頃	熊ヶ渡
210	6	磁器鉢	11.5	2.5	2.5	15.50	0.8	0.5	1.50	100g	熊ヶ渡 熊ヶ渡	1000 年頃	1000 年頃	熊ヶ渡
210	7	磁器鉢	11.5	2.5	2.5	15.50	0.8	0.5	1.50	100g	熊ヶ渡 熊ヶ渡	1000 年頃	1000 年頃	熊ヶ渡
210	8	磁器鉢	11.5	2.5	2.5	15.50	0.8	0.5	1.50	100g	熊ヶ渡 熊ヶ渡	1000 年頃	1000 年頃	熊ヶ渡
210	9	磁器鉢	11.5	2.5	2.5	15.50	0.8	0.5	1.50	100g	熊ヶ渡 熊ヶ渡	1000 年頃	1000 年頃	熊ヶ渡
210	10	磁器鉢	11.5	2.5	2.5	15.50	0.8	0.5	1.50	100g	熊ヶ渡 熊ヶ渡	1000 年頃	1000 年頃	熊ヶ渡
210	11	磁器鉢	11.5	2.5	2.5	15.50	0.8	0.5	1.50	100g	熊ヶ渡 熊ヶ渡	1000 年頃	1000 年頃	熊ヶ渡

別表8 大田藩跡 土器類群表

群別	品名	形状	高さ	口径	底径	口縁径	口縁厚	底厚	重量	出土層	出土位置	出土時期	出土状況	備考
220	1	磁器鉢	11.5	2.5	2.5	15.50	0.8	0.5	1.50	100g	大田 大田	1000 年頃	1000 年頃	大田
220	2	磁器鉢	11.5	2.5	2.5	15.50	0.8	0.5	1.50	100g	大田 大田	1000 年頃	1000 年頃	大田
220	3	磁器鉢	11.5	2.5	2.5	15.50	0.8	0.5	1.50	100g	大田 大田	1000 年頃	1000 年頃	大田
220	4	磁器鉢	11.5	2.5	2.5	15.50	0.8	0.5	1.50	100g	大田 大田	1000 年頃	1000 年頃	大田
220	5	磁器鉢	11.5	2.5	2.5	15.50	0.8	0.5	1.50	100g	大田 大田	1000 年頃	1000 年頃	大田
220	6	磁器鉢	11.5	2.5	2.5	15.50	0.8	0.5	1.50	100g	大田 大田	1000 年頃	1000 年頃	大田
220	7	磁器鉢	11.5	2.5	2.5	15.50	0.8	0.5	1.50	100g	大田 大田	1000 年頃	1000 年頃	大田
220	8	磁器鉢	11.5	2.5	2.5	15.50	0.8	0.5	1.50	100g	大田 大田	1000 年頃	1000 年頃	大田
220	9	磁器鉢	11.5	2.5	2.5	15.50	0.8	0.5	1.50	100g	大田 大田	1000 年頃	1000 年頃	大田
220	10	磁器鉢	11.5	2.5	2.5	15.50	0.8	0.5	1.50	100g	大田 大田	1000 年頃	1000 年頃	大田
220	11	磁器鉢	11.5	2.5	2.5	15.50	0.8	0.5	1.50	100g	大田 大田	1000 年頃	1000 年頃	大田
220	12	磁器鉢	11.5	2.5	2.5	15.50	0.8	0.5	1.50	100g	大田 大田	1000 年頃	1000 年頃	大田
220	13	磁器鉢	11.5	2.5	2.5	15.50	0.8	0.5	1.50	100g	大田 大田	1000 年頃	1000 年頃	大田
220	14	磁器鉢	11.5	2.5	2.5	15.50	0.8	0.5	1.50	100g	大田 大田	1000 年頃	1000 年頃	大田
220	15	磁器鉢	11.5	2.5	2.5	15.50	0.8	0.5	1.50	100g	大田 大田	1000 年頃	1000 年頃	大田

別表9 陣ヶ崎北藩跡 土器類群表

群別	品名	形状	高さ	口径	底径	口縁径	口縁厚	底厚	重量	出土層	出土位置	出土時期	出土状況	備考
230	1	磁器鉢	11.5	2.5	2.5	15.50	0.8	0.5	1.50	100g	陣ヶ崎北 陣ヶ崎北	1000 年頃	1000 年頃	陣ヶ崎北

写真図版



五反田 山島新田 加茂新田 鶴森地区周辺の空中写真



五反田地区 調査地近景 (東から)



五反田地区 3トレンチ調査風景 (西から)



五反田地区 1トレンチ土層断面 (南から)



五反田地区 3トレンチ土層断面 (南から)



山島新田地区 11～15 トレンチ周辺近景 (西から)



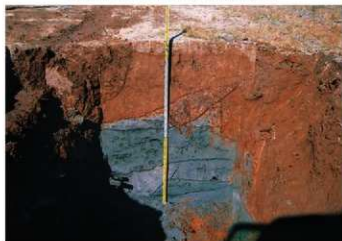
加茂新田地区 21～23 トレンチ周辺近景 (東から)



加茂新田地区 22 トレンチ調査風景 (北から)



加茂新田地区 32 トレンチ調査風景 (北東から)



山島新田地区 12 トレンチ土層断面 (西から)



山島新田地区 18 トレンチ土層断面 (南から)



山島新田地区 19 トレンチ土層断面 (南から)



加茂新田地区 22 トレンチ土層断面 (南から)



加茂新田地区 24 トレンチ土層断面 (東から)



加茂新田地区 25 トレンチ土層断面 (西から)



加茂新田地区 26 トレンチ土層断面 (西から)



加茂新田地区 27 トレンチ土層断面 (東から)



鷗森地区 1～3 トレンチ周辺近景 (北から)



鷗森地区 7 トレンチ調査風景 (北東から)



鷗森地区 5 トレンチ土層断面 (北東から)



鷗森地区 7 トレンチ土層断面 (南西から)



堀割遺跡 調査地近景（東から）



堀割遺跡 調査地近景（南東から）



堀割遺跡 土層断面（北東から）



堀割遺跡 出土遺物

全て (1:3)



古見道遺跡 遠景（南西から）



古見道遺跡 調査風景（北西から）



古見道遺跡 全景（北西から）



古見道遺跡 全景（南東から）



古見道遺跡 基本土層断面 (北から)



古見道遺跡 SP 1 確認状況 (北から)



古見道遺跡 SP 2 確認状況 (北から)



古見道遺跡 SP 4 砥石出土状況 (東から)



1・2 (1:3)
 その他 (1:6)

古見道遺跡 出土遺物



西吉津川遺跡 馬越遺跡 荒又遺跡 太田遺跡周辺の空中写真



西吉津川遺跡 調査風景 (南から)



西吉津川遺跡 調査風景 (南西から)



西吉津川遺跡 調査風景 (東から)



西吉津川遺跡 遺構確認状況 (南東から)





馬越遺跡 調査風景 (北から)



馬越遺跡 調査風景 (北から)



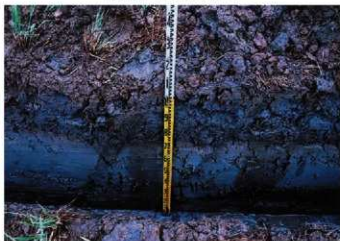
馬越遺跡 調査風景 (西から)



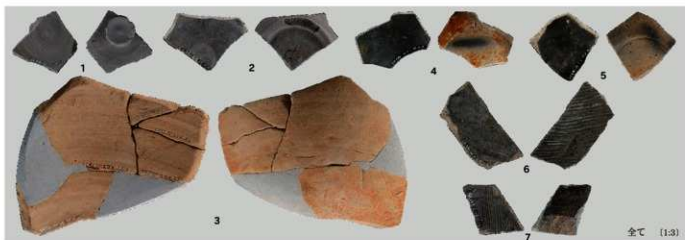
馬越遺跡 調査風景 (東から)



馬越遺跡 土層断面 (東から)



馬越遺跡 土層断面 (西から)



馬越遺跡 出土遺物

全て 1:3



荒又遺跡 調査風景 (南西から)



荒又遺跡 調査風景 (南東から)



荒又遺跡 土層断面 (南から)



荒又遺跡 土層断面 (南東から)



5 [1-4]
その他 [1-3]



太田遺跡 調査風景（北から）



太田遺跡 調査風景（東から）



6 赤外線写真 (1:2)
 7 赤外線写真 (2:3)
 その他 (1:3)



舞台遺跡周辺地 調査地近景（南から）



舞台遺跡周辺地 2トレンチ調査風景（東から）



舞台遺跡周辺地 1トレンチ土層断面（北から）



舞台遺跡周辺地 3トレンチ土層断面（北から）



陣ヶ峰遺跡 陣ヶ峰北遺跡周辺の空中写真



陣ヶ峰遺跡 調査地近景（北西から）



陣ヶ峰遺跡 1トレンチ調査風景（北から）



陣ヶ峰遺跡 1トレンチ土層断面（西から）



陣ヶ峰遺跡 2トレンチ土層断面（西から）



陣ヶ峰北遺跡 調査地近景（北から）



陣ヶ峰北遺跡 1トレンチ調査風景（南から）



陣ヶ峰北遺跡 1トレンチ土層断面（東から）



陣ヶ峰北遺跡 出土遺物

報告書抄録

ふりがな		かもしないせきかくにんちようさほうこくしょ						
書名	平成19年度 平成20年度 平成21年度	加茂市内遺跡確認調査報告書						
副書名								
巻次								
シリーズ名	加茂市文化財調査報告(20)							
編著者名	伊藤秀和							
編集機関	加茂市教育委員会 社会教育課							
所在地	〒959-1392 新潟県加茂市幸町2丁目3番5号 TEL.0256) 52-0080							
発行年月日	西暦 2010年11月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 …	東経 …	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
五反田地区	加茂市大字五反田	15209		37度 31分 16秒	139度 01分 13秒	20071003	64	信濃川下流河川災害復旧等関連緊急事業
山島新田地区	加茂市大字山島新田	15209		37度 40分 55秒	139度 00分 14秒	20070614 20080228 20090513 ～ 20080515	289.3	信濃川下流河川災害復旧等関連緊急事業
加茂新田地区	加茂市大字加茂新田	15209		37度 40分 58秒	139度 00分 48秒	20081106 ～ 20081107		信濃川下流河川災害復旧等関連緊急事業
鶴森地区	加茂市大字鶴森	15209		37度 41分 02秒	138度 59分 43秒	20090129 ～ 20090130	53	信濃川下流河川災害復旧等関連緊急事業
堀原遺跡	加茂市大字天神 林字宮ノ瀬349ほか	15209	113	37度 40分 08秒	139度 00分 54秒	20090313 ～ 20090319		農業基盤整備事業
古見直道跡	加茂市大字下大谷字中田228-1	15209	156	37度 36分 53秒	139度 06分 49秒	20090430	150	農業基盤整備事業
西吉津川遺跡	加茂市大字天神 林字西吉津川1066ほか	15209	118	37度 39分 41秒	139度 00分 43秒	20081004 ～ 20081126		県営ほ場整備事業吉津川地区
馬越遺跡	加茂市大字下 集字馬越甲1763ほか	15209	117	37度 39分 28秒	139度 01分 17秒	20091005 ～ 20091109		県営ほ場整備事業吉津川地区
荒又遺跡	加茂市大字下 集字荒又甲1106ほか	15209	171	37度 39分 03秒	139度 01分 33秒	20091005 ～ 20091110		県営ほ場整備事業吉津川地区
太田遺跡	加茂市大字下 集字太田1078ほか	15209	163	37度 39分 03秒	139度 01分 48秒	20091005 ～ 20091029		県営ほ場整備事業吉津川地区
舞台遺跡 周辺地	加茂市大字上 集699-1ほか	15209		37度 39分 34秒	139度 03分 46秒	20070910	43	宅地造成工事
陣ヶ峰遺跡	加茂市大字陣ヶ峰194-1ほか	15209	147	37度 40分 12秒	139度 03分 06秒	20080612	15	集合住宅新築工事
陣ヶ峰北遺跡	加茂市大字千両三丁目147-2ほか	15209	137	37度 40分 16秒	139度 03分 00秒	20081009	15	集合住宅新築工事
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
五反田地区								
山島新田地区								
加茂新田地区								
鶴森地区								
堀原遺跡	遺物包含地	古代		土師器、須志器				
古見直道跡	集落跡	近世	土坑、ピット	肥前編笠、磁石、杜梨				
西吉津川遺跡	遺物包含地	古代・中世		土師器、須志器、珠洲焼				
馬越遺跡	集落跡	古代・中世		土師器、須志器、珠洲焼				
荒又遺跡	集落跡	古代・中世		土師器、須志器				
太田遺跡	集落跡	古代・中世		土師器、須志器、珠洲焼				
舞台遺跡周辺地								
陣ヶ峰遺跡								
陣ヶ峰北遺跡	遺物包含地	古代		須志器				

加茂市文化財調査報告(20)

平成19年度 平成20年度 平成21年度

加茂市内遺跡確認調査報告書

五反田地区 山島新田地区 加茂新田地区 鶴森地区 堀原遺跡 古見直道跡 西吉津川遺跡
馬越遺跡 荒又遺跡 太田遺跡 舞台遺跡周辺地 陣ヶ峰遺跡 陣ヶ峰北遺跡

印刷月日 平成22年11月25日

発行月日 平成22年11月30日

発行・編集者 加茂市教育委員会

〒959-1392 新潟県加茂市幸町2丁目3番5号

TEL. 0256 (52) 0080

印刷所 有限会社 いとう印刷

〒959-1378 新潟県加茂市駅前4番4号

TEL. 0256 (52) 0696